

『広田社歌合』注釈(一)

武 田 元 治

『広田社歌合』は、承安二年(一一七二)十二月、道因(俗名藤原敦頼)が勧進して、摂津の広田神社(現在西宮市にある)に奉納した歌合で、判者を藤原俊成が務めている。

道因がこれを広田社に奉納することを志した動機は、『長秋詠藻』(四七一詞書)によれば、前に『住吉社歌合』が奉納されたのを広田社の神がうらやむ由の夢の告げがあったのによるという。それで、この歌合の構成も、嘉応二年(一一七〇)十月の『住吉社歌合』に準じたところが認められる。

歌題は社頭雪、海上眺望、述懐の三題で、各題二十九番、歌人は次の五十八人である。

- (左) 公通、実定、小侍従、実国、観蓮、三河内侍、俊恵、成範、実家、大輔、実宗、頼実、修範、顕広王、政平、重保、資隆、広季、親重、季広、顕綱王、仲綱、季定、邦輔、懐綱、懐能、智経、姓阿、中納言
- (右) 重家、頼政、実房、師光、実綱、実守、俊成、盛方、登蓮、経盛、隆信、季経、寂念、道因、憲盛、通清、経正、広言、朝宗、伊綱、隆親、佐、広盛、安心、祐盛、憲経、経尹、浄縁、素覚

この五十八人の内、『住吉社歌合』の歌人であった人は三十八人に及んでいる。全体として当時の歌壇を網羅しているが、六条藤家の歌人

は少な目で、『住吉社歌合』には参加していた清輔も加わっていない。伝本は、歌合の原本を判者俊成が自筆で転写した前田家尊経閣文庫本が代表的なものである。本稿では、これを底本とする『新編国家大観』の本文により、解釈を試みる。その本文に判詞を左右で段落を分けて示された点も、不自然にならない限り従った。ただし、句読点や返り点は私見によって新しく付した。

社頭雪

一番 左勝 正二位行陸奥出羽按察使藤原朝臣公通

1 ゆふしでの風にみだるるおとさえてにはしろたへにゆきぞつもれる

右 從三位行太宰大貳藤原朝臣重家

2 あさまだきゆきふりしけるひろまへにあとふみつけば神やいさめん
左歌、風にみだるるおとさえてなどいへるすがた、歌合のうたとおぼえて、いとをかしくこそ侍めれ。

右歌、こころことばいひかなへられて、社頭雪はかやうにこそはとみえ侍るを、かみしものくのはじめにおなじもある事は、おもきなんにはあらねど、天徳四年の内裏の歌合にも判者とがめ申されたる事に待れば、左うるはしくなんなく侍らんにとりては、いささかの事もいかがはとて、以^レ左^レ為^レ勝。

【通釈】

社頭雪

左勝

一番 木綿^{ゆわた}四手^{しで}の、風に吹かれ、乱れる音がさえて、(社殿の前の)庭は真っ白に、雪が積もっている。

右

從三位行太宰大式藤原朝臣重家

2 早朝、雪の一面に降った社殿の前の庭に、踏んで足跡を残そうとしたら、神がお止めになるであろう。

左の歌は、「風に乱るる音さえて」などと詠んでいる姿が、歌合の歌と言うのにふさわしいものと思われて、大層風情のある作のようです。

右の歌は、心と言葉の面で適切な表現をされていて、社頭の雪(このう題)はこのように詠むべきだろうと思われませんが、上下の句の初めに同じ(「あ」の)文字があるのは、重大な欠点ではないけれど、天徳四年の内裏の歌合でも判者が非難する意見を申されたことですから、左の歌が整った詠み様で非の打ち所がないように見えますにつけて、ささいな問題点も見逃すべきでないと考えて、左の歌を勝とします。

【注】○ゆふしで 木綿で作った「四手」。「四手」は、神にささげる物として榎^{かほ}などに付けて垂らして用いた。○ひろまへ 広前。社殿の前庭。○いさめん この「いさむ」は、制止する意。○おもきなん 重き難。重大な欠点。○天徳四年の内裏の歌合 天徳四年(九六〇)三月三十日、村上天皇が清涼殿で催した歌合。十二題二十番。判者は左大臣藤原実頼。晴儀歌合の典型とされる。

【考察】左の歌は、社前の木綿四手が風に吹かれ乱れる音がさえて、庭は純白の雪に覆われていると詠む。聴覚と視覚との両面から清浄森厳な社頭の様子を伝えており、声調も滞るところがない。

右の歌は、早朝、雪に覆われた社前の庭に、もし人が足跡を残そうとしたら、神がお止めになるであろうと詠む。

俊成の判詞は、左の歌については、「歌合の歌」と言うのにふさわ

しく、「いとをかしく」思われると評している。一首が題意に合う内容を、整った姿、のびやかな声調で詠んでいる点を評価したものでろう。

右の歌については、「心言葉言ひかなへ」、「社頭雪」の題をよく生かした点を評価するが、上句と下句の初めに同じ(「あ」の)文字があるのを、問題点として挙げています。歌病に言う文字病に関する指摘である。そして先例として天徳四年の『内裏歌合』に言及しているが、これはその十八番右歌の、

ことならばくもるの月となりなむこひしきかげやそらにみゆると

に対する判者の言葉に、
右歌の上下の句の上に、同じ文字ぞあめる。にくさげにぞ。

と「こ」の重複を難じた例を挙げたのである。ただしその判詞の終わりの方には「させる難にはあらぬ」とあり、俊成も多分その点を考慮に入れてのことと思われるが、「重き難にはあらねど」と言っている。しかし左の歌が「うるはしく難なく」詠まれているのと比較する時は、右の歌のわずかな問題点も見逃せないとして、左の勝と判定している。

このように文字病(同音をもつ語の重複するもの)を指摘することは、俊成が師の基俊などから継承した批評上の観点で、永万二年の『重家朝臣家歌合』の判詞の場合と変わっていない。俊成は後年、『六百番歌合』の判詞では、こういう文字病をとがめるのを「旧儀」とし、『古来風体抄』では、歌病は同心病(同義の語の重複するもの)以外は避けるべきでないと言うに至るが、この『広田社歌合』の判詞の段階では、なお従来の歌病の観点に従っていることが知られる。

【備考】一番左歌は『新古今集』(一一八九〇)に収められている。

二番

左持

3 なに事に身をもしまでしらくきの神のいがきをこえんとすらん

右

正四位下行右近権大夫源朝臣頼政

正二位藤原朝臣実定

4 しめのうちによをとほすかなしたぎえぬかしらのゆきをうちはらひつつ

左、これはゆきのいみじくふかくふりて、いがきをもこえぬべきころなるべしとはみ侍れど、ころおよびがたくぞ侍める。義珠^{チキズ}よりもかたくして、愚老の判者、ころおよびがたくぞ侍める。

右、かしらのゆきをうちはらひつつといへるころ、いとあはれには侍るを、これはまことのゆきやすくなからんとぞみえ侍れど、したぎえぬとおけることばにころこもりて、ふるゆきをはらへるなるべしと、社頭に通夜せるころをかしくも侍れど、左ゆきも心もふかくみえ侍れば、勝劣さだめがたくて、持と申し侍るべし。

【通釈】

二番 左持

正二位藤原朝臣実定

3 一体どんなことがあって、その身を惜しまず、白雪は、神の社の玉垣を越えようとするのだろうか。

右

正四位下行右近権大夫源朝臣頼政

4 社の境内に通夜をして祈る、——下は（白雪で）消えない頭上の雪を、度々払いながら。

左の歌、これは雪が大層深く降り積もって、社の玉垣を越えそうになったことを詠んだものであろうとは思いますが、思い入れが雪よりも深く、趣意が珠^{たま}よりも珍しくて、この愚かな年寄りの判者には、到底心の及びにくい作のようです。

右の歌は、「かしらの雪をうち払ひつつ」と詠んだ心が、大層胸を打つのですが、この場合は（白髪も雪とするので、その分）本物の雪は少ないだろうかと見られます。しかし「下消えぬ（かしの雪）」と言った言葉は心が深くこめられていて、その降りかかった頭の雪を払ったのであろうと、社前に通夜をした心が面白く思われます。けれども、左の深い雪の歌も思い入れの深い作と見受けられますから、優劣が定め難いので、持と申すことにしま

しよう。

【注】○神のいがき 神社の玉垣。「齋垣^{いさかき}」は、神聖な場所を囲む垣で、みだりに越えてはならないものとされた。○しめのうち 神社の境内。「標^{しるべ}」は、神域を示すしるし。○よをとほす 徹夜をして物事を行なうことを言うが、ここでは神前に通夜をして祈る意で言ったのであろう。○したぎえぬかしらのゆき 下消えぬ頭の雪。「下消ゆ」は、雪の下の方が解けること。ここでは頭上の雪の上の方は本物の雪だが、下の方は白髪を雪に見立てて、これは解けることがないの言った。○義珠よりもかたくして 趣意が珠^{たま}よりも珍しくて。「かたし」は、めったにない意。この意味の「かたし」の用例は、「女の、これはしもと難つくまじきは、かたくもあるかな」（『源氏物語』帚木）など。

【考察】左の歌は、一体何事によって「身をも惜しまで」白雪が「神の齋垣^{いさかき}を越え」ようとするのだろうか、と詠む。これはその言葉から見て、次のような『万葉集』に源をもつ歌を念頭に置いた作かと思われる。

ちはやぶる神の齋垣も越えぬべし今はわが名の惜しけくもなし

〔万葉集〕二六六三

ちはやぶる神の齋垣も越えぬべし今はわが身の惜しけくもなし

〔古今和歌六帖〕一〇六五

ちはやぶる神の齋垣も越えぬべし今はわが身の惜しけくもなし

〔拾遺集〕九二四、柿本人麿

なお、これと同じ上句をもつ類歌も『伊勢物語』（七十一段）に見えるが、この古歌は、恋の思いの強さゆえに、もはやわが身も惜しくない、越えてはならぬとされる「神の齋垣」を「越えぬべし」と詠んだものであろう。実定の左歌は、それを念頭に置いて、社の垣を越えんばかりに降る白雪を擬人化し、あの白雪は一体何事ゆえに身を惜しまず「神の齋垣を越えん」とするのか、と詠んでいると思われる。

右の歌は、社の境内に通夜をする様子を、「下消えぬかしらの雪を

うちはらひつつ」と詠む。これはその言葉から見て、次の赤染衛門の歌の表現を用いているかと思う。

思へただかしらの雪をはらひつつさえぬさきにといそぐ心を(榊)

原本『赤染衛門集』三二七)

一首は『今昔物語集』(巻二十四第五十一話)には、上句が「思へきみかしらの雪をうちはらひ」の形で収められている。赤染衛門がその子の挙周(たかちか)の任官を願って司召(つかさめ)の折に奉った歌である。この一首の「かしらの雪」は、下句「消えぬ先にと急ぐ心を」と対応することで、白髪の老いの身であることを示している。頼政の右歌は、この赤染衛門の歌の「消えぬ」に「下消えぬ」と新しい意味をもたせて「かしらの雪」の形容に用い、それによって白髪の身であることを示し、雪の社頭で通夜をする情景の中に取り入れたものであろう。

俊成の判詞は、左の歌については、雪が深く降り積もって斎垣も越えそうな様子を詠んだものであろうとは推察するが、「心深く」、優れて珍しい内容で、判者である自分には「心及びがたく」思われると評する。「神の斎垣も越えぬべし」と詠んだ古歌が、俊成の念頭になかったのかもしれない。

右の歌については、下句の心を「いとあはれ」と言うとともに、頭の雪を「下消えぬ」の言葉で形容した点を「心こもりて」と評する。そして一首として社頭に通夜をした心が「をかしく」思われるが、左歌も「心深く」見えるので、勝劣は定め難いとしている。

三番 左

太皇太后宮小侍従

5 とくるまもつもるもえこそみえわかねとよみてぐらにかかるとゆるゆき

右勝

正二位行権大納言藤原朝臣実房

6 山あもてすれるころもにふるゆきはかざすくらちるかとぞみる
左、しろたへのみてぐらにゆきをかけて、とくるもつもるもわきがたからんころ、いとをかしくは待ると、右の、すれるころもにゆきをおひて(大成)、かざしのはなにまがへられて侍る心すがた、い

とめづらしく、えんにみえ侍るうへに、左は、さきにも侍りつるくのはじめのもじも、毛をふくにや、みえ侍れば、以^レ右為^レ勝。

【通釈】

三番 左

太皇太后宮小侍従

5 (雪の)溶けた間も、積もる時も、見分けがつきません、——(純白の)御幣に降りかかる白雪は。

右勝

正二位行権大納言藤原朝臣実房

6 山藍(やまあい)で染めた衣に、降りかかる雪は、頭に挿す桜が散りかかるかと思えた。

左の歌は、白い御幣に白雪の降りかかる情景に仕立てて、雪が溶けたのも積もったのも見分け難いとした心が、大層面白く思われます。しかし右の歌の、(山藍で)染めた衣に雪を受けて、(その雪を)頭に挿す花が散ったかと思誤ったと詠まれてます一首の心や姿は、大層珍しく、また優美に見えます。その上、左の歌は、前(の一番)にもありましたが上下の句の初めの文字が同じである点も、しいて欠点を求めるようですが、見受けられますので、右の歌の勝とします。

【注】○とよみてぐら 幣帛(へいはく)を、賛美する心で言う語。「豊」(とよ)は美称。「みてぐら」は、神にささげる幣帛、特に布(紙)を切り木にはさんで垂らした御幣。○山あもてすれるころも 「山藍」(やまあい)は、トウダイグサ科の多年草で、葉を絞った液が染料に用いられ、「山ゐ」とも言われた。その山藍で(青く模様を)摺り染めにした衣。これは神事に着る小忌衣として用いられた。「山ゐもてすれる衣の長ければ長くぞ我は神につかへむ」(『貫之集』一三七「臨時の祭」)などと詠まれている。○かざすくら 冠に飾りとして挿す桜。この場合造化である。○しろたへ 白袴(しろたへ)。木の皮の繊維を用いて織った白い布。○毛をふくにや しいて欠点を挙げることになろうか、との心を挿入句として記した。「毛をふく」は、「毛を吹いてきずを求む」の成語による。

【考察】この左右の歌は、ともに色を眼目にしたところがある。題が

「社頭雪」なので雪の白さを詠み、それに左歌は御幣の白を重ね、右歌は山藍の衣の青を対照させて詠んでいる。

すなわち左の歌の「豊みてぐら」は、

しろたへの豊みてぐらを取り持ちていはひぞそむる紫の野に
〔長能集〕一六、〔後拾遺集〕一一六四

の歌にも見られるとおり、社頭の清浄さを示すように純白のものとして取り上げられており、それにかかる白雪は、溶けた間も積もる時も見分けられない、と詠む。

一方、右の歌の「山藍もてする衣」は、「注」に引いた歌の外にも、あしひきの山あるにされる衣をば神につかふるしとぞ見る
〔貫之集〕三七一「臨時の祭」。〔拾遺集〕一一四九では第二句「山あるにされる」

なども詠まれ、神事に着用する小忌衣で、青く模様を摺り染めにしたものである。その衣に降りかかる雪を、冠に挿す桜の花が散りかかるかと思われ、と詠んでいる。これは祭の折雪の中に舞う舞人の姿と見るべきであろうか。俊成も後に冬の祭の折の山藍の衣の姿をとらえた有名な一首、

月さゆるみたらし河にかけ見えて氷にされる山藍の袖
〔新古今集〕一八八九

があるが、それに比べると実房の右歌は、降る雪を「かざす桜の散るか」と見た点で、動きとともに艶な美しさをもつようである。

俊成の判詞は、左の歌は、「いとをかしく」は思われるが、右の歌は、その心姿が「いとめづらしく」また「艶」に見えると思評する。そして左の歌には、一番右歌の判詞で指摘したような歌病、文字病も見られると言い、右の勝としている。

【備考】三番右歌は『新勅撰集』(五五一)に収められている。

四番 左勝

從二位行権大納言藤原朝臣実国

7 おしなべてゆきのしらゆふかけてけりいづれさかきのこずゑなるらん

右 從五位上源朝臣師光

8 つねよりもけふこむ人をあはれとやつもれるゆきに神もみらん
左歌、ゆきのしらゆふかけてけり、といへるころすがた、まことにとほしらく、よままほしきさまにも侍るかな。

右歌、けふこむ人をあはれとや、とよまれたることばつづき、いひしりて、いとをかしくこれもみえ侍れど、なほ左歌風体足嗟
嘆。仍勝と申し侍るべし。

【通釈】

四番 左勝

從二位行権大納言藤原朝臣実国

7 一面に雪が積もり、(社殿の前に) 白木綿を掛けわたしたと見える、
——それが榊のこずえであろうか。

右

從五位上源朝臣師光

8 常とは違い今日、(社に) 来る人があれば、感心な者だと、積もった雪につけて神も御覧になろうかと思う。

左の歌は、「雪の白木綿かけてけり」と詠んだ心、姿が、実におらかで品位があり、望ましい歌の姿であると思います。

右の歌は、「けふ来ん人をあはれとや」と詠まれた言葉の続け方が、詠み様を心得た風で、大層面白くこの歌も見られますけれど、やはり左歌の姿が感服されます。そこで左の勝と申しましょう。

【注】○おしなべて すべて一様に。○しらゆふ 白木綿。楮の樹皮をさらしたりして白いひも状にしたもので、幣帛として榊の枝に掛けることなどに用いた。○さかき 榊。神事に用いる常緑樹を本来言ったが、特にツバキ科の常緑小高木のサカキをその代表とするようになったらしい。ここでは神域内にあるサカキであろう。○けふこむ人をあはれとや 今日来る人があれば、その人を感心だと思つて。「山里は雪ふりつみて道もなしけふこむ人をあはれとは見む」〔拾遺集〕二五一、平兼盛)による。○とほしらく「とほしろし」は、『万葉集』の

歌に、「明日香の古き都は山高み川とほしろし」〔三三七〕などと用いられている場合、雄大さを表すと見られている。しかし平安時代末期あ

るいは中世初頭の和歌の評語に用いられた場合、また新しい意味合をもつかと思われる。ここでは、おおらかで品位の感じられる歌の心姿を言っているのではないかと思う。なお「考察」で考えたい。○仍よりて。

【考察】左右の歌は、社頭に降り積もった雪を取り上げている点は同様だが、取り上げ方はかなり相違する。

左の歌は、雪の一面に降り積もった様子を上句に「おしなべて雪の白木綿かけてけり」と歌いきり、下句に白木綿を掛ける榊も雪に覆われて見えない由を詠む。雪が積もったのを白木綿を掛けたのに見立てる着想は珍しいものではなく、先行歌に例をとれば、

くれなるに見えしこずゑも雪ふれば白木綿かくる神なびの森
〔詞花集〕一五七、藤原忠通

などと詠まれている。しかし左歌は外に格別な趣向を用いず、言わば単純な形でのびやかに歌っており、そのせいで一面の雪の白木綿の景が印象的に表現されたところもあるかと思う。

右の歌は、「積もれる雪」のことを第四句に置いて、「今日こむ人をあはれとや……神も見るらん」と詠む。これは、平兼盛の歌、

山里は雪ふりつみて道もなしけふこむ人をあはれとは見む〔拾遺集〕二五一

に発想上のわくを借り、「あはれ」と見る主体を神に変えて詠んだものであろう。

俊成の判詞は、左の歌については、第二・三句を引いて心姿が「とほしろく」思われると言い、望ましい歌い様と高く評価している。この「とほしろし」という言葉は、歌合の評語としては『広田社歌合』に初めて見えるようで、その意味するところが注目される。用例が見られるのは、この社頭雪四番判詞と、二十八番判詞である。二十八番判詞の用例は、

たとふべきかたこそなければ広前の浜松が枝えにふれる白雪（浄縁）
の一首を「とほしろし」と評したものである。この二首の「とほし

し」とされる歌について共通点を求めると、社前一带に白雪の降った景を、特に技巧をこらさず単純な形でのびやかに詠み下していると思われる点、さらに言えばそれによって清浄な雰囲気を与え、一種の品位を感じさせる点であろうか。そういう点から評語「とほしろし」の意味を推測すると、おおらかで品位の感じられる歌の様態を言った評語ではないかと思う。

ただ「とほしろし」の意味はこれだけの用例では確定しきれないところもあり、例えば『和歌大辞典』で「白色美をふくむ雄大・壮大美」と解し、『万葉集』の「登保志呂トホシロ之」の語になかった「白し」の意をこの評語に認める見方も、心引かれるものがある。ただし「とほしろし」は「心姿」について言われている評語であって、一首の風景に白色美を感じてもそのまま「白し」と評したと見るのは疑問が残る。白色美も含めて、品位が感じられる意味で評した語と見ておきたい。

右の歌については、俊成は、兼盛の歌を取り入れたあたりを引き、「言葉続き言ひしりて」と言い、「いとをかしく」見えると評するが、左右を比較する観点から、やはり左歌の風体が感服されると言い、左の勝としている。

【備考】四番左歌は『千載集』（二二六六）に収められている。

五番 左

左京夫人入道観蓮

さかさばもかくるにぎてのいろいろもみなしろたへにゆきぞふりつむ

右勝

参議従三位行左大藤原朝臣実綱

10しめのうちにふるしらゆきのきえぬまはそのいろならぬあけのたまがき
左、題のころろにかなひ、歌のすがたたくみにして、いとをかし
くこそ侍るを、いささかおぼつかなき事ぞ侍める。かくるにぎて
のいろいろもとよまれたるにぎては、ふるきふみにも、種シノ麻マをも
てあをにぎてとし、穀コメ木キをもてしらにぎてとすとぞ申マウしたるか
や。さかさばのいろにあをカチノキナリしとはきこえぬ。ゆきのふりつむにし
ろしとはみえぬるを、そのほかににぎてのいろいろにあまたある

べしともおぼえ侍らぬは、ひが事にや侍らん。

右、ふるしらゆきのきえぬまはそのいろならぬあけのたまがきといへるころをかしく、ことなるなんなし。正説をうけたまはりひらかんほど、先以^レ右為^レ勝。

【通釈】

五番 左 左京大夫入道観蓮

9 榭の葉も、(榭に) 掛けた和幣のそれぞれの色も、皆真^ッ白に押し包んで、雪が降り積もる。

右勝

参議従三位行左大弁藤原朝臣実綱

10 社の境内に降る白雪が、消えない間は、その色と見えない朱の玉垣よ。

左の歌は、「社頭雪」という) 題の心にふさわしく、歌の姿も巧みで、大層面白いのですが、少々不審なことがあるように思えます。「掛くる和幣のいろいろも」と詠まれている和幣については、古い文献にも、麻を用いて青和幣とし、楮を用いて白和幣とすると書いていたかと思う。そして榭の葉の色で青いのは分かる。また雪が降り積もると白いと見えるわけだが、その青と白の色の外に和幣の色がさまざまに沢山あろうとは思われませんが、これは間違っているでしょうか。

右の歌は、「降る白雪の消えぬ間はその色ならぬ朱の玉垣」と詠んだ心が面白く、とりたてて言うほどの欠点もない。左歌の「和幣のいろいろ」について(疑問を記したが) 正しい見解を承って納得がゆけば別だが、それまでは当面右歌を勝としておく。

【注】○さかきば 榭の葉。「さかき」は四番の「注」参照。○にぎて 和幣。『古事記』には「にきて」(丹寸手)と見える。榭の枝に掛けて神を祭るしにした麻・楮の布。(後には紙を使用。)○しめのうち 社の境内。○あけのたまがき 朱の玉垣。神域の内外を区切る垣を赤く塗ったもの。○おぼつかなき事 不審に思うこと。○種麻 漢字の左右の片仮名は底本にあるもので、右側は「しょうば」という

読みを示し、左側は「麻なり」という注記である。○あをにきて 青

和幣。麻布で作ったにきて。楮などから作った白和幣に比べてやや青みを帯びる。○穀木 漢字の左右の片仮名は底本にあるもので、右側は「こくぼく」という読みを示し、左側は「かぢの木なり」という注記である。「かぢの木」はクワ科の落葉高木で、和幣の原料になるクワ科の落葉低木の「かうぞ」(楮)とは異なるのであるが、『新撰字鏡』に「楮 加地乃木」とあるように、楮を言う名称として用いられることがあった。「穀木」は楮の木のこと。○さかきばのいろにあをしとはきこえぬ 日本古典全書『新訂歌合集』で、「きこえぬ」に「合点がゆかない。納得できない。」と注されるのは、「ぬ」を打消の助動詞とされたと思われる。しかし、この「ぬ」は完了の助動詞で、「きこえぬ」は、合点がゆく、納得できることを確言した用法であろうと思う。

この点は、「榭葉の色に青しとはきこえぬ」が、次の「雪の降り積むに白しとは見えぬ」と対応する形で言われている点からも考えられる。なお、「青」という語は本来、青の外に緑や藍など広い範囲の色を示すのに用いられた。こういう「青」の用い方は今日でも緑色の葉を「青葉」と言うことに見られる。○うけたまはりひらかんほど「うけたまはりひらく」は、「聞きひらく」(聞いて納得する意)の謙讓語。うかがって納得がゆくまでの間。

【考察】左右の歌は、ともに社頭に降り積もる白雪を中心に色彩の方面から情景をとらえているが、左の歌は、榭の葉もそれに掛けた和幣の「色々」も皆純白に包んで雪が降ると詠む。右の歌は、境内に白雪の降り積もった間は朱の玉垣も「その色」と見えないと詠む。

俊成の判詞は、左の歌については、題の心を生かし歌の姿も巧みで「いとをかし」と評価する一方、「にきての色々」と詠んだ点に対して、青と白の外に多くの色があるとは思われないと疑問視している。

右の歌については、「心をかし」と評価し、「ことなる難なし」と言って、右の勝と判定している。

六番 左

二条院三河内侍

11 さかきばのかをとめくればふるゆきにやそうぢ人のそでやさゆらん
参議従三位行右近衛中将藤原朝臣実守

右勝

12 ゆきふかきおまへのはまに風ふけばまつのうれこすおきつしらなみ
左歌、やそうぢ人のそでやさゆらんといへるころこすおきつしらなみ
をかしくきこえ侍るを、かの、さかきばのかをかぐはしみとめく
ればといへる神楽のうたに、のこりすくなく侍らん。

右歌、おまへのはまに風をふかせて、まつのうれこすおきつし
らなみといへるうたのすがた、ゆきのおもかけ、すでに嫉妬のこ
ろおこり侍るにや。よりて又右のかちとす。

【通釈】

六番 左

二条院三河内侍

11 榊葉の香に引かれ、社前に尋ねてくると、降る雪の中、多くの氏人
が神楽を奏していたが、その袖も凍てつくかと思えた。

右勝

参議従三位行右近衛中将藤原朝臣実守

12 雪の深い御社前の浜に風が吹くと、(雪が舞い立って、)松のこずえ
を沖の白波が寄せて越えてゆくと見えた。

左の歌は、「八十氏人の袖やさゆらん」と詠んだ心や言葉が、大
層面白く思われますが、あの「榊葉の香をかぐはしみとめくれ
ば(八十氏人ぞまとみせりける)」と詠んだ神楽の歌と、同様の
言葉が多く、外の新しい部分が少ないかと思えます。

右の歌は、(雪の深い)御社前の浜に風の吹く様子とし、それを、
「松のうれ越す沖つ白波」と詠んだ歌の姿、そこに思い浮かべら
れる雪の面影は、ねたましい心が起こるほどの(見事な)作かと
思います。そこで、これも右の勝とします。

【注】○とめくれば 尋ねてくると。○やそうぢ人 多くの氏の人々。

『万葉集』にも用例のある言葉だが、ここでは上句の言葉から見て
神楽歌の「さかき葉の香をかぐはしみとめくればやそ氏人ぞまとみせ
りける」(『拾遺集』五七七)によったと見られるので、神楽をするの

に集まった多くの人々を言ったのであろう。○まつのうれ 松のこず
え。○さかきばのかをかぐはしみとめくれば 前記の神楽歌の上句。

榊の葉の香りがよいので尋ねてくると、の意。○神楽 神を祭るため
に社前で行う舞楽。楽人が神楽歌をうたい楽器を奏し、舞人が舞をま
う。

【考察】左の歌は、俊成も判詞に指摘するように、神楽歌の、

榊葉の香をかぐはしみとめくればやそ氏人ぞまとみせりける
〔『拾遺集』五七七〕

によって詠まれていることが、用語の共通する点から考えられる。た
だし、社前に集まって神楽を奏する人々の様子を「降る雪」に「袖や
さゆらん」ととらえたのは、元の神楽歌にない新しいイメージを加え
たものである。

右の歌は、雪の深く積もった社前の浜に風が吹くと、「松のうれ越
す沖つ白波」と詠んでいる。松のこずえを沖の白波が寄せて越えたと
見えた、というのであるが、これは松のこずえに雪が風で舞う様子を、
そのように見たということであろう。社前の浜の白一色の雪景色を、
動きを入れて大きくとらえている。

俊成の判詞は、左歌については、特に下句の心言葉を「いとをかし
く」と評価する一方で、基づいたと思われる神楽歌と同様の言葉が多
すぎて、新しいところが少ないと批判している。

右の歌については、松のこずえに雪が風で舞う様子を「松のうれ越
す沖つ白波」ととらえた点を高く評価し、勝と判定している。

七番

左勝

僧俊恵

13 しめのうちに神さびにけるはふりがかしらのゆきぞふりかさねつる
右 正三位行皇太后宮大夫藤原朝臣俊成

14 いさぎよきひかりにまがふちりなれやおまへのはまにつもるしらゆき
左、神さびにけるとおき、かしらのゆきぞふりかさねつるといへ
るころこ、いとをかしくこそ侍めれ。

右、すがたことば、ことなること侍らぬうへに、判者のうたに侍りけり。依例不_レ加_レ判。

【通釈】

七番 左持

僧俊恵

13 神域の内に老いた神職の、頭（の白髪）に雪が降り添い、雪を重ねたと見えた。

右

正三位行皇太后宮大夫藤原朝臣俊成

14（和光同塵の言葉どおり、）清浄な光を宿す塵と見える、——社前の浜に積もる白雪は。

左の歌は、「神さびにける」と言った上で「かしらの雪ぞ降り重ねつる」と詠んだ心が、大層面白く思っています。

右の歌は、その姿や言葉に格別取り柄もない作ですし、判者の私の歌なのです。前例に従って判を加えないことにします。

【注】○しめのうち 神域の内。社の境内。○神さびにける 世俗を離れて神々しい感じをもつ点なども含め、年老いた意である。○はふりこ 祝子 神に仕えることを職とする人。神職。○いさぎよき

光 清浄な光。○光にまがふ塵 光と区別なく見える塵。「和光同塵」を背景にした表現。「和光同塵」は、仏教で、仏・菩薩が衆生を救うために本来の威光を和らげて俗世に仮の姿を現わすことを言い、日本では特に本地垂迹の思想から、仏・菩薩が神として出現することを言った。○なれや 「なれ」は、断定の助動詞「なり」の已然形。「や」は、詠嘆の意の終助詞。○おまへのはま 神前の浜。ここでは

広田の社の前の浜。

【考察】左右の歌は、いずれも清浄な社頭の白雪をとり入れて詠んでいるが、左の歌は、神域の中で年をとった神職の頭の白髪に、白雪がかかる様子を、「頭の雪ぞ降り重ねつる」と見立てる趣向によっている。

右の歌は、社前の浜に積もる白雪を、清浄な「光にまがふ塵」として詠んでいる。これは「和光同塵」の語に基づいて、仏・菩薩と一体

の存在と神を見、その社の前の浜の白雪を神仏の威光を象徴するものとしてとらえたのであろう。

俊成の判詞は、左歌については、神職を「神さびにける」と言った上で「頭の雪ぞ降り重ねつる」と詠んだ心が、「いとをかしく」思われると評している。

右歌については、歌の姿言葉が取り柄がないとし、判者である自分の歌なので「依例不_レ加_レ判」と言っている。

歌合で判者が作者でもある場合、自作に判を加えない考え方があったことは、清輔の『袋草紙』にも見え、

また判者、作者たるの時、我歌に至りては判を加はず。故実か。ただし人々の心々なり。（漢文を訓み下し文にした新日本古典文学大系本による）

学大系本による）

として、基俊がこれを故実としたことなどを記している。（ただし基俊が判者と作者を兼ねた歌合で現存するものでは、基俊は自作にすべて判を加えている。）俊成もこの考え方をとり、かつて判者を務めた『住吉社歌合』でも二番にわたり、自作には例によって判を加えない旨を記している。（旅宿時雨二十五番、述懐十番）もっとも俊成はこれを全面的に実行しているわけではなく、『住吉社歌合』では自作のある三番中一番、この『広田社歌合』では自作のある三番中二番は、自作に一応触れて判詞を記している。その場合の判詞について見ると、自作に関して判詞を記すのは、やはり書きつらかったかと思われる。

八番

左勝

正三位行左兵衛督藤原朝臣成範

15 ゆきふれば神のしるしやこれならんしらゆふかけぬさかきばぞなき

右

盛方

16 神がきやあとたれそめしにはなればゆきもここにぞあまくだりける

左歌、うるはしくだりてさせるとがなく侍り。

右は、あとたれそめしにはなればゆきもここにぞなどいへるころ、をかしくは侍るを、たれそめし、あまくだるなどや、おなじ

心なることばに侍らん。ふかきなんにはあらねど、左うるはしく侍れば、かつと申すべくや。

【通釈】

八番 左勝

正三位行左兵衛督藤原朝臣成範

15 雪が降ると、神の靈験とはこのことだろうか、白木綿を、榊葉のすべてに掛けわたしたと見えた。

右

盛方

16 神域は、神として降臨された所なので、雪もここを目指して、天から降ってくるのだった。

左の歌は、整った様子に詠みくだされていて、これという欠点も見えません。

右の歌は、「跡垂れそめし庭なれば雪もここにぞ」などと詠んだ心が、面白いとは思いますが、「垂れそめし」と「天下る」などは、同じ内容の言葉に当たるとしようか。これは著しい欠点とするほどのことではないけれど、左の歌が整った風に詠まれていすから、左が勝ると言うべきかと思われまます。

【注】○神のしるし 神の靈験。神の不思議なあかし。○しらゆふ

四番の「注」参照。○神がき 神社の垣の意から、神社の境内、神域の意に用いた。○あとたれそめしには 神として「垂跡」された場所。

「垂跡」は、仏教で、仏・菩薩が教化・救済のために具体的な姿を示現することを言い、日本では特に神仏を一体と見る習合思想により、神として現れることを言った。

【考察】左の歌は、社前の櫛に一面に雪が積もった景を、白木綿を掛けわたした状態に見立てており、この点は四番左歌などと同様の趣向であるが、その状態を「神のしるし」、神の靈験によってもたらされたものか、と詠んでいる。

右の歌は、神仏習合、垂跡の思想に基づいて、神域は神として「跡垂れそめし庭」なので、雪も特にここに「天下りける」と詠む。神が天界から降臨された所だから、雪も神を慕うように天下った、という

発想であろう。

俊成の判詞は、左歌については、「うるはしく」詠み下され、別に欠点もないと評価する。右歌については、その発想が「をかしく」は思われるけれど、「垂れそめし」と「天下る」が同様の内容である（歌病に言う「同心病」に当たる）点を指摘し、著しい欠点ではないが、左右を比較すれば左が勝ると判定している。

しかし、右の歌の発想を認めるなら、神が「跡垂れそめし」と言うのに対応して、雪が「天下りける」と言うのは、非難に値するであろうか。その点、俊成の批判は歌病の同心病にこだわり過ぎたところがあるかもしれない。

九番

左持

正三位行右近衛中将藤原朝臣実家

17 ありし秋のすみのえにみし月のいろをけふかみがきにうつすゆきかな

右

僧登蓮

18 ゆきふればあけのたまがきおしなみてひまなくかくるしらにきてかな
左、すみのえにみし月のいろをけふかみがきにうつすゆきかな、
といへる、両社のあひだ月とゆきとのいろかよへるところ、いと
をかしく侍り。

右、あけのたまがきおしなみてとおき、ひまなくかくるなどいへることばつづき、いひしりつよくきこえ侍り。左はをかし。右はうるはし。うたのすがたあひにずといへども、かれこれをなすらふるに、なほ持とす。

【通釈】

九番

左持

正三位行右近衛中将藤原朝臣実家

17 以前の秋、住の江で眺めた月の色を、今日はこの（広田の）社頭に
移して、（白く清らかに）降り積もる雪よ。

右

僧登蓮

18 雪が降ると、朱の玉垣も皆一様に、一面に白和幣を掛けわたす姿になった。

左の歌で、「住の江に見し月の色をけふ神垣にうつす雪かな」と詠んでいるのは、住吉の社と広田の社との間に、月の色と雪の色とが共通すると見た心で、大層面白いと思います。

右の歌で、「朱の玉垣おしなみて」と言った上で、「ひまなく掛くる」などと詠んだ言葉の続け方は、心得た詠み様で、強い印象を与える表現と思われれます。(要するに)左の歌は(発想が)面白い。それに対して右の歌は(詠み様が)整っている。それで歌の姿は似ていないけれども、あえて左右の歌を比べてみると、やはり持と言うことになる。

【注】○ありし秋 以前の秋。かつての秋。○すみよえ 住の江。摂津の国の歌枕。今の大阪市住吉区の住吉大社のあたりで、海辺の地。

『万葉集』で「すみよえ」と言われたのが、その表記の一つが「住吉」であったところから、平安時代には「すみよし」とも言われた。『八雲御抄』巻五では、「江」の項に「すみよえ」を挙げ、「里」「岸」「浜」「浦」「社」の項に「すみよし」を挙げている。○かみがき 八番の「注」参照。○おしなみて 群書類従本・歌合部類本「おしなべて」。

おしならして、の意。○しらにぎて 五番の「注」参照。○両社 住吉神社と広田神社を、ここでは言う。○いひしり 表現の仕方を心得ていて。

【考察】左の歌は、先年の秋に住の江で眺めた月の色を、今日はこの広田の社頭に移して降り積もる雪よ、と詠んでいる。作者の実家は、かつて『住吉社歌合』社頭月六番左歌に、

すみよしの松のむらだち風さえて敷津の波にやどる月かな
と歌った。その折のことを念頭に置いて、以前住吉の社頭で眺めた月の色に通じる清らかな白さを、今日広田の社頭で眺める雪の色に見いだしたという心であろう。

右の歌は、雪が降ると朱の玉垣も一様に白色に変わり、一面に「白にぎて」を掛けわたしたと見えた、と詠む。平明な作である。

俊成の判詞は、左の歌については、住吉社頭の月の色と広田社頭の

雪の色を共通するとした発想を、「をかし」と評価し、右の歌については、その「言葉続き」の面に注目し、詠み様を心得た作と見て「うるはし」と評価し、左右をあえて比較すれば持であるとする。

十番 左 前斎宮大夫

19 しめのうちのまつふきすます風のおともむもる(群書類従)ばかりにふれるしらゆき右勝 従三位平朝臣経盛

20 しらゆきはとだえもみえずふりにけりいづこなるらんあけのたまがき
左、まつふきすますといひ、むもるばかりになどよめるけしき、
ふかくおもへる事とはみえ侍り。

右、とだえもみえずふりにけりといへることば、ところのなをひけるころにとりて、いとをかしきうへに、左のふきすますは、なほあまりなることばにやあらむ。又以_レ右為_レ勝。

【通釈】 十番 左 前斎宮大夫

19 神域の松を吹く風のさえた音も、(松が)埋もれて消えるほど、降り積もった白雪よ。右勝

20 白雪は、絶え間も見えず降り積もった、——どこにあるのだろう、朱の玉垣は。従三位平朝臣経盛

左の歌は、「松吹きすます」と言い、「埋るばかりに」などと詠んだ様子が、いかにも深く思い入れているとは見られます。

右の歌は、「とだえも見えず降りにけり」と詠んだ言葉が、所の名を取り入れた作意と思われるにつけて、大層面白く、また顧みると左の歌の「吹きすます」は、やはり度を越えた表現であろうかと気になる点がある。右を勝とする。

【注】○しめのうち 七番の「注」参照。○ふきすます 笛などを上手に吹き鳴らす場合に言われる語だが、ここでは松に風が吹いて、さえた音を響かせるのを言った。○むもる 「うもる」(群書類従本)に

同じ。埋もれる。

【考察】左右の歌は、ともに社頭に「白雪」が深く降り積もった様子を詠んでいるが、左の歌は聴覚的な面も詠み入れて、神域の「松吹きすます風の音」も、今は白雪で松が埋もれて聞こえなくなった様子を取り上げている。そこまで思い入れて詠んだ点に、作者の工夫があるのであろう。

右の歌は専ら視覚的なとらえ方で、白雪は「とだえも見えず」降り積もって、「朱の玉垣」のありかも分からない、と詠む。これは左歌に比べて単純でのびやかな詠み様である。

俊成の判詞は、左歌については、まず「松吹きすます」、「埋るばかりに」などと詠んだ点を「深く思へる事」とは見える、と一応評価している。一方、右歌については、「とだえも見えず降りにけり」と詠んだ言葉に関して「所の名を引ける心」と認め、「いとをかし」と高く評価する。これは絶え間の意味の「とだえ」に地名の「とだえ」を掛けた表現と見たのであろう。

しかし歌枕の地名として「とだえ」を認めることについては、『五代集歌枕』でも『八雲御抄』でも疑問を残している。『五代集歌枕』では「橋」の項に、

あやふしと見ゆるとだえの丸橋まるはしのまろなどかかるもの思ふらん
〔後拾遺集〕七八九、相模）
の歌を引いて、

とだえのはし 若非三所名、只読歟。仍除之。

と記す。『八雲御抄』名所部「橋」の項でも「とだえのはし」の名を挙げるが、

是只よめる歟。又名所歟。

と記している。また『夫木抄』では、「橋」の題の中に「とだえのはし」を挙げ、

いさや又ふみも見られずともすればとだえのはしのうしろめたさに（九四一二、俊頼）

外二首の歌を取めるが、国名は記していない。

さて、俊成の判詞では、なお左歌の問題点として、風が松を「吹きすます」と詠んだのを、「あまりなる言葉」であろうと指摘する。笛などを上手に吹く場合に用いられる「吹きすます」という言葉を、ここで松風に関して用いたのを、擬人化にもせよ問題のある表現と見たのであろう。そして右の勝とする。

十一番 左勝

正四位下行右近衛中将藤原朝臣実宗

21日にそへてふりつもりつつみづがきにひさしくゆきもきえぬなりけり

右

隆信

22ふりにけるとしのかずのみとおもひしにゆきさへつもるあけのたまがき
左歌、日ごろふりつもるゆきを、みづがきによせて、ひさしくきえずといへるころすがた、いとをかしこそ待めれ。

右歌、ことばつかひなどあしくは侍らぬを、たまがきのとしつもるらん事、いづれのやしろもさこそは侍る事なれど、ふるのやしろなどをや、わきてかくはいふべからんとおぼえ侍れば、以レ左為レ勝。

【通釈】

十一番 左勝

正四位下行右近衛中将藤原朝臣実宗

21日増しに（雪は）降り積もって、久しく続く社の瑞垣みずがきに、雪も久しく消えずにいるのだった。

右

隆信

22積もるのは、専ら古くからの年の数だと思つたが、その上雪も積もるのだ、——社の朱の玉垣あけに。

左の歌は、数日にわたって降り積もる雪を、（久しく続く）社の瑞垣みずがきに関連させて、「久しく」消えないと詠んだ心や姿が、大層面白く思われます。

右の歌は、言葉の用い様などは悪くはありませんが、玉垣の年数が積もるといったことは、どの社でも通用することに違いないの

ですけれども、布留ふるの社などについて、特にこのように詠むのがよからうと思われまので、対する左の歌を勝とします。

【注】○日にそへて 日がたつにつれて。○みづがき 瑞垣みづがき。「玉垣」と同様、神社の垣を言う。清輔の『和歌初学抄』には、「昔より言ひならはしたることあり。ひさしき事には」として「ミツガキ」等を挙げる。○ふるのやしる 「布留ふる」は大和の国の歌枕で、今の奈良県天理市の地名。布留川が流れ、石上神宮いそがみがある。『万葉集』にすでに「いにしへもかく聞きつつかしのひけむこの古川ふるかはの清き瀬の音を」（二二五）と詠まれており、古い土地だったと見られる。前記『和歌初学抄』には、「ふるき事には」として挙げた中に「フルノヤシロ」がある。

【考察】左右の歌は、ともに社の垣に雪が降り積もった様子に関する思いを、社の垣と雪の積もったのを結びつける言葉を工夫して詠んだ点が共通していると思う。

すなわち、左歌では、社の瑞垣が久しく続くように、日増しに降り積もる雪も「久しく」消えない、と詠む。また右歌では、古い歴史をもつ社の玉垣で、積もるのは専ら年の数だと思っただが、それに加えて雪も「積もる」のだ、という作意であろう。

俊成の判詞は、左歌については、降り積もる雪を、久しいものとされる瑞垣に関連させて「久しく消えず」と詠んだ心姿を、「いとをかしく」と評価している。

右歌については、玉垣の年が積もることは社一般に通用するが、特に古いことに詠み習わされる「布留の社」などの場合に適当な言葉だろうと言い、対する左歌を勝としている。

十二番 左持

23 さゆるよのふるしらゆきにうづもれてあけのたまがきいろかへてけり

右

正四位下行皇后宮亮藤原朝臣季経

24 さかきばにゆきのしらゆふとりしてでそらさへ神をまつるなりけり

トラスサヘト本ニカケリ

左、すがたことばいひなれて、もじつづきなどをかしくも待るかな。

右、これは、そらさへと待るにや。これもころすがた興ありては待るを、とりしてでといへるわたりや、そらのしわざならばほどとほきやうにやとぞおぼえ侍れど、ふかきなんにはあらぬうへに、そらさへ神をなどいへるすがたも、なほをかしく侍れば、持とや申すべからん。

【通釈】

十二番 左持

正四位下行右近衛中将藤原朝臣季実

23 しんしんと冷える夜の、降る白雪にうづもれて、朱の玉垣も色を変えてしまった。

右

正四位下行皇后宮亮藤原朝臣季経

24 榎きぬぎの葉に雪が降り、雪の白木綿しろゆうを掛けて垂らして、空までが神を祭ると見えた。
左の歌は、姿言葉が詠み慣れた風で、言葉の続き様など、実に面白いことです。

右の歌、これは「とらさへ」と書いてあるが、「そらさへ」と詠まれたものかと思えます。この歌も心と姿が面白く詠まれてはいますが、「取り垂しでて」と詠んだあたりは、空の行爲とすれば距離が遠過ぎる感じがあるうかと思われます。けれども重大な欠点とは言えないし、「空さへ神を」などと詠んだ姿は、やはり面白く見えますので、持と判定すべきであろうかと思えます。

【注】○ゆきのしらゆふ 雪を白木綿しろゆう（四番の「注」参照）に見立てた表現。○とりしてで 取り垂しでて。掛けて垂らして。神楽歌の用例に「榎きぬぎに木綿ゆうとりしてでたが世にか神の御室みむろを斎いはひそめけむ」（榎）がある。○そらさへ 空まで。底本の左注に「トラスサヘト本ニカケリ」とある。判者俊成のもとに送られてきた本に、「そら」とあるべきところか、「とら」と読めるように書かれていたのであろう。

【考察】左の歌は、寒夜、降る白雪にうづもれて朱の玉垣も色を変え

たと詠む。平明な作である。

右の歌は、降る雪で榊葉に白木綿を掛けたと見えるが、これは空までが神を祭るのだ、と詠む。降った雪を白木綿を掛けたのに見立てることは、この歌合でもすでに四番左歌や八番左歌などに見え、珍しい趣向ではない。ただその雪の白木綿を掛けたのを、空が神を祭ったしわざととらえた点には、独自性がある。

俊成の判詞は、左歌については、姿言葉に詠み慣れた手腕が感じられ、言葉の続き様が「をかし」と評価する。言葉続きでは主になだらかな声調に注目したものとと思う。

右歌については、その心と姿を「興あり」と評価する。ただ問題点として、榊に白木綿を掛けるのを空の行為とすると、空からでは距離が遠過ぎる感じがあるうか、と指摘しているようである。ただし、そういうことは大した問題でないとはい添え、やはり「空さへ神を」祭るなどと詠んだ点が「をかし」思われると言いい、持と判定している。

十三番 左持

25 しめのうちにつもるとならばしらゆきのきえずもあらなん神のしるしに
右 沙弥寂念

26 ふるゆきをあまつをとめやたむくらんしらゆふかくとみゆるさかきは
左右いづれも優麗にして、ことなるがなし。可_レ為_レ持。

【通釈】

十三番 左持

25 神域に積もるといふのなら、白雪は、消えずにいてほしい、——神の靈験として。

右

26 降る雪を、天女が神にお供えているのだろうか、——白木綿を榊の葉に掛けたと見える。

左右の歌は、どちらも優麗であって、問題になるような欠点は無い。持とすべきであろう。

【注】○神のしるし 神の現わす不思議な効験。神の靈験。○あまつをとめ 天上界の少女。天女。

【考察】左の歌は、神域に積もる白雪が神の靈験で消えずにいてほしいと願う心を詠む。清浄な白雪が神域を飾るのにふさわしいものと見えての作であろう。

右の歌は、降る雪で社前の榊の葉に白木綿を掛けたと見えるが、あれは「天つをとめ」が神に供えたものだろうかと思ふ。榊に雪が積もった様子を白木綿を掛けたと見る趣向は珍しくないが、その白木綿を天女が神に供えたものかとする点に独自性がある。

俊成の判詞は、左右の歌がともに「優麗」で、目立った欠点もないと評し、持とする。「優麗」という評語は、歌合の判詞に用いられた先例が見いだしにくいと思う。これは俊成が、二首の特色を「優」として一般的な優美さを言うだけでは的確でないと見るところから、二首が整った表現で典雅な趣をもつことを含めて言い表わすために、「優麗」の語を造語して用いたのではないかと思う。

【備考】十三番右歌は『新統古今集』（一七九四）に収められている。

十四番 左

27 よみまつるやまとことはたへなれば神のころのゆきぞつもれる
右勝 沙弥道因

28 さかきとるむこのやま風さえさえてやしるもしろくゆきふりにけり
左歌、こころもめづらしく、神のころのゆきつもるらんも、か

やうの愚判のことばをくはへ侍るまで、ほいある心ちこそし侍れ。ただし右歌の、むこのやま風さえさえてといへるすがたころ、上下あひかなひてよろしくきこえ侍れば、なほ右のかちとは申し侍りぬ。

【通釈】

十四番 左

27 神にささげて詠む和歌が、優れているので、神も満足され、そのみ

心そのままに（清浄な）雪が積もっている。

右勝

沙弥道因

28（神を祭る） 榊を採る、武庫^{むく}の山から吹く風が、冷えに冷えて、社も真っ白に雪が降ったことだ。

左の歌は、その着想が目新しく、「神の心のゆきぞつもれる」などと詠まれたのも（結構で）、このように私が判を加えますことまで、本望という気がします。

しかし右の歌の、「武庫の山風さえさえて」と詠んでいる姿や心は、上の句に下の句がよく調和して結構に思われますので、やはり右の勝と判定した次第です。

【注】○よみまつる（神に）詠みたてまつる。「まつる」は、補助動詞として、動作の対象を敬う謙讓表現を作る。○やまとことのはたへなれば 和歌が優れているので。この歌合の歌全体を意識して言ったと思われる。○こころのゆき 「心行く」、満足する意を掛けて、（神の）心を示す雪の意で言ったのであろう。○むこのやま 武庫^{むく}の山。今の兵庫県神戸市・芦屋市の北にある六甲山。○ほいある 本意ある。本望と思われる。

【考察】左の歌は、この歌合の和歌のことを社頭の雪に結びつけた着想が異色の作であらう。神にささげる和歌が優れているので、神も満足され、その神の心を示して清浄な雪が積もったと詠んでいる。和歌が神前で披露される時のことを想定した作と思われる。

右の歌は、叙景的に歌った作で、武庫の山風がさえわたる様子を背景にして、「社も白く雪降りにけり」と詠んでいる。冗句を省いて単純化した詠み様で、さえた武庫の山風を受けて白雪に包まれた広田の社の清浄森厳な様子を印象づける作であらう。

俊成の判詞は、左歌については着想が「めづらしく」見える点を挙げ、また下句を高く評価する。ただし、対する右歌について、「武庫の山風さえさえて」などと詠んだ姿と心に注目し、上下の句がよく対応し調和している点も「よろしく」思われるとして、右の勝と判定し

ている。

十五番

左持

賀茂県主政平

29 さかきばにふりつむゆきのしらゆふに神のころはまづとけぬらん
右 憲盛

30 あとたるるとだえの神やこれならんおまへのはまのゆきのむらぎえ
左右ともうたのころことばはをかしく侍るを、ゆきは又おの
おの心とけたるほどに侍れば、持とや申すべからんとぞ。

【通釈】

十五番

左持

賀茂県主政平

29 榊の葉に降り積もる雪の、白木綿を掛けたと見える様子に、神の心はまづうち解けられたであらう。

右

範盛

30 この世に現われた、とだえの神（の姿）は、これであらうかと思つ、
——み社の前の浜に、雪が所々解けて途切れている。

左右ともに歌の心や言葉は面白いと思いますが、雪についてはまた、それぞれ内容が解けた様子に関係するようですから、持と申すべきであらうかと思ひます。

【注】○あとたるる 神として垂跡した。八番の「注」参照。○とだえの神 未詳。「とだえ」は、途中で切れることを意味する語で、地名と見られた形跡もある。（十番の「考察 参照」）「とだえの橋」などは歌語とされたらしいが、「とだえの神」は目下他に用例が見いだせない。○ゆきのむらぎえ 雪がまだらに所々消えていること。

【考察】左の歌の上の句で、榊葉に積もる雪を白木綿に見立てた趣向は、この歌合でも四番左歌以下多く見えるので、その雪の白木綿に対して「神の心はまづとけぬらん」と詠んだ下の句に独自性があることになる。心が「とけ」るは、うち解ける意であるが、また雪の縁語として言われている。

右の歌は、社前の浜の雪が所々解けて途切れている様子を、垂跡し

た「とだえの神」の姿に見立てた趣向に、特色を出そうとした作であろう。「とだえの神」については、目下その用例が他に見いだせないが、「むすびの神」(『元輔集』四七、『大斎院前の御集』二四三)や「むすぶの神」(『拾遺集』一二六五、『詞花集』二〇五等)が歌に詠まれていることを考えると、「とだえの神」があっても不自然ではないとも思われる。(もっとも「むすびの神」は、本来は「むすひの神」、万物を生み出す神であって、正確な意味で「とだえの神」と対立するものではないが。)あるいは、「とだえ」は十番の俊成の判詞では「所の名」と見られているらしいから、「とだえの神」は「とだえ」の地に祭られる神であろうか。

俊成の判詞は、左右ともに「歌の心言葉はをかしく侍るを」と評した後に、

雪は又おのおの心とけたるほどに侍れば

と言って持と判定している。この判詞は、このままの形ではいささか分かりにくい点があるように思う。二首それぞれについて「心とけたる」と言うが、左歌は神の心が解けることを詠んでいるが、右歌は雪が所々解けたのを詠んだものである。すると、この「心とけたる」の「心」は、歌の心と言ったと見るべきであろうか。あるいは「とだえの神」の心も解けたというのであろうか。もし「心とけたる」の「心」が俊成の筆の誤りで余計に加えられたとすれば、解しやすいかとも思うが、当面現在の本文に従って仮に「通釈」のように解した。

十六番 左

31 さかきばもゆきのしたにてきねはやすおとにぞ神のすみかをばしる
右勝 通 清

32 やをとめのたちまふにはにゆきふればみなしろたへのそでかどぞみる
左歌は、さかきばもゆきのしたにていひ、おとにぞ神のなどいへるころ、をかしく侍るを、なかのいつもじやすこし俗にちかく侍らん。

右歌は、みなしろたへのなどいへるは、めづらしき事にあらねど、やをとめのそではいろいろならんに、みなゆきのいろにみゆらんころ、よろしくきこゆ。以_レ右かつと申すべくや。

【通釈】

十六番 左

賀茂県主重保

31 (社の前の) 榊の葉も、雪の下に隠れて、神職の神楽を奏する音で、神の宮居の在りかを知るのです。

右勝

通 清

32 八乙女の立ち舞う神楽の場所に、雪が降ると、乙女たちは皆、白い袖をひるがえて舞うかと思える。

左の歌は、「榊葉も雪の下にて」と詠み、「音にぞ神の(住みかをば知る)」と詠んだ心が、面白いと思えますが、三句目(「きねはやす」)は少々俗に近い言い様であろうかと思われまます。

右の歌は、「みな白たへの」などと詠んだのは、目新しいことではないけれど、八乙女の袖はそれぞれ異なる色であろうが、それが皆雪の白い色に見えるという心は、結構に思われる。右が勝ると言うべきかと思えます。

【注】○きねはやす 神職の人が神楽を奏する。○やをとめ 八乙女。神社に奉仕し、神楽の折に舞う乙女たち。人数が八人の定めであったかどうかは不明とされる。

【考察】左の歌は、社前の榊の葉も雪に埋もれて見えないので、神職の神楽を奏する音で社の在りかを知る、と詠む。

右の歌は、八乙女が神楽で舞うところに雪が降ると、皆白い袖で舞うかと思える、と詠む。左右とも雪の降る様子を強調して描いているようだが、それを趣向とした作であろう。

俊成の判詞は、左歌は心は「をかしく」思われるが、第三句「きねはやす」は「すこし俗に近」い言い様であろうと批判している。右歌については、八乙女の袖が雪で皆白く見えると詠んだ心を、「よろしく」思われると評価し、勝としている。

十七番 左持

資隆

33 はふりこがいはふさかきのしらゆふにしてかけそふるけさのゆきかな

右

正五位下行右兵衛佐平朝臣経正

34 ゆきみては神もさこそはおもふらめあとふみつけしみつ(新編国歌大観等)のひろまへ

左のしでかけそふるといひ、右の神もさこそはなどいへるころ、

いづれも興ありてはみえ侍るを、左のけさのゆきかな、右のゆき

みてはなど侍るほど、なほすこしおもふべくやともみえ侍れば、

持と申すべし。

【通釈】

十七番 左持

資隆

33 神職が神を祭った神の白木綿(しらゆふ)に、さらに(白木綿の)四手を掛け

えたと見える、今朝の雪よ。

右

正五位下行右兵衛佐平朝臣経正

34 この雪を見ては、神もさぞ気に掛けられているであろう、——踏ん

で足跡をつけないようにしよう、御社前の(美しい)雪よ。

左の歌で「しで掛けそふる」と詠み、右の歌で「神もさこそは」

などと詠んだ心は、いずれも面白いとは思われますが、左の歌の

「けさの雪かな」、右の歌の「雪見ては」などと詠まれています

たり(の表現)は、やはり今少し考えてみるのがよいかとも思わ

れますので、持と判定しましょう。

【注】

○はふりこ 祝子(はりこ)。神に仕える人。神職。○いはふ 神を(神

聖なものとして)祭る。○しで 四手(しで)。神にささげるために榊などに

付けて垂らした木綿(ゆ)。(後には紙で作る。)「四手」の字はあて字で、

元は垂らす意の動詞「垂づ」の連用形の名詞化したもの。○神もさこ

そはおもふらめ 神もさぞかし気に掛けておられるであろう。「おも

ふ」は、氣に掛ける意に解したい。なお「考察」で触れる。○あとふ

みつけし 踏んで足跡をつけることを避けよう。『新編国歌大観』『平

安朝歌合大成』では、「あとふみつけし」としている。○みづのひろ

まへ「瑞(みづ)の広前」で、「瑞の」は美称、神(社)の御前を敬って言っ

た語。『新編国家大観』には「みづのひろまへ」とあり、これは『日

本古典全書新訂歌合集』、『平安朝歌合大成』に「御津(みづ)の広前」とする

のを受けた読みであろうか。しかし「御津の広前」の用例は外に見え

るだろうか。「瑞の広前」と見られる用例は、『後拾遺集』の「あめの

したはぐくむ神のみそなればゆたけにぞたつみづのひろまへ」(一一

七三)の歌などがある。この一首は詞書に「大式成章(なほのり)肥後守にて侍り

ける時、阿蘇社に御装束してたてまつり侍りけるに、かの国の女のよ

み侍りける」とあるので、「御津の広前」ではない。『和歌童蒙抄』

(第六、仏神部)では、この歌について「みづのとは瑞也」と言っ

ている。なお『和歌童蒙抄』は、この歌の前に、やはり『後拾遺集』の

「稲荷山(いなりやま)みづの玉垣(たまがき)うちたたきわがねぎ」とを神もこたへよ」(一一六

六、惠慶法師)を挙げ、「みづの玉垣」は瑞垣を意味するが、ここで

は稲荷の「三つ」の社の垣を掛けていると注している。「みづの浜松」

などの「みづの」は「御津の」であるが、「広前」「玉垣」等の語の前

に置かれる「瑞の」はそれと区別して見たいと思う。

【考察】左の歌は、用語の上では『拾遺集』に収める神楽歌、

さかき葉にゆふしでかけてたが世にか神のみ前にいはひそめけん

(五七六)

あたりの影響もありそうだが、雪を白木綿に見立てる例の趣向を中心

にして、神職が神に掛けた白木綿(の四手)の上に、今朝の雪はさら

に白木綿の四手を掛け添えた見える、と詠んでいる。

右の歌は、御社前の雪を見て神もさぞ気に掛けられているだろう、

踏んで足跡をつけないようにしよう、と詠んだ作と解したい。

この右歌について、峯岸義秋氏は日本古典全書『新訂歌合集』に、

下句を「あと踏みつけし御津の広前」として、次のように注された。

「あと踏みつけし」の主語は「人」であるが、「神もさこそは思ふ

らめ」といひたかったのであらう。雪の上に跡をつけて詣る人々

のやうに、神もおりたつての意。それほどこの御津の、神の広々

とした大前の雪景色はみごとであったといふのである。御津は三

津とも書き、万葉集に歌はれた。この地方一帯を指していふ。もとは勿論海外交通の湊を意味してゐた。

この注解について疑問に思うことの一つは、雪の上に「神もおり立つて」跡をつけようと思うだろうと解されているらしい点である。

一体、広前の雪に「あと踏みつけ」ることに対する神の心を詠んだ歌は、『広田社歌合』の社頭の雪の題の歌の中に、この一首の外にも見えるので、

朝まだき雪ふりしける広前にあと踏みつけば神やいさめん（一番右、重家）

という作がある。その場合、広前の雪に「あと踏みつけ」ことを神は望まないとされている。また、

玉垣のうちへは入らじふる雪を踏ままくをしと神もこそ見れ（二七番左、智経）

という作もある。これも境内の雪を踏んで跡をつけるのを神は望まないとしたものである。

そして、こういう神の心は人の心を反映したものとと思われるので、社前の雪を踏んで跡をつけることに対する人の心を詠んだ歌を併せて見ると、次の歌に見られるように、やはりそれを望まない心を基本にしている。

人はいさ我とは踏まじ神垣や広田の浜にふれる白雪（十八番右、広言）

しめの内に立ち舞ふきねも心せよお前の雪にあともこそつけ（二十番右、伊綱）

さらに、一般に庭の雪を踏んで跡をつけることに関する思いを詠んだ歌の先例を探ると、

まつ人の今もきたらばいかげん踏ままくをしき庭の雪かな
『和泉式部集』一七〇、『詞花集』一五八、『和泉式部続集』五六

六では第四句「庭の白雪」
雪ふれば踏ままくをしき庭のおもをたづねぬ人ぞうれしかりける

『六条修理大夫集』三二四

山里はあとなき庭の雪見ても人のとはぬもうれしかりける（『忠盛集』一二七）

庭のおもにふりつむ雪の上を見て今朝こそ人は待たれざりけれ
（『重家朝臣家歌合』雪一番右、小侍従）

などの作がある。これらの歌は、美しく積もった雪に足跡をつけるのを望ましくないとする見方の伝統があったことを示している。それで『広田社歌合』の社頭の雪の歌も、一般にその伝統的な見方を受け継いでいると考えてよいであろう。

右歌の作者の経正は、祖父の忠盛、父の経盛らとともに平家の歌人を代表する一人であるから、そういう伝統的な通念を知らなかったとは考えにくいであろう。またそれを知っていて無視する可能性も、特に強い個性を歌に示した人ではないだけに、少ないと思われる。そうすると、一首が通念に背いて、雪の上に「神もおり立って」跡をつけようと思うだろうと詠んだと解するよりも、通念に従って詠んだと見る方が妥当ではないか。そんな観点から「通釈」のような大意の作と解釈したいと思うが、いかがであろう。

『新訂歌合集』の注解に対して今一つ疑問に思うのは、歌の第五句を「御津の広前」とされた点で、これは「瑞の広前」ではないかと思われることを「注」に記した。

さて、俊成の判詞は、左右の歌に共通する長所と短所を挙げて、持と判定する。すなわち左の「四手掛けそふる」、右の「神もさこそは」などと詠んだ「心」を「興あり」と評する一方、左の「今朝の雪かな」、右の「雪見ては」などと詠んだのを「なほすこし思ふべくや」と批判している。二首ともに、発想に面白い点はあるが、表現になお洗練を要する部分が見られると指摘したものであろう。

十八番 左勝

広季

35 あまくだるそのかみよりやふりくらんゆきつもれりとみゆるたまがき

右 広言

36 人はいさわれとはふまじ神がきやひろたのはまにふれるしらゆき
左、そのかみよりやふりくらんといへる。こころことばいひしり
てこそきこえ侍れ。

右も、神がきやひろたのはまにとよめるすがたはよろしくみえ侍
れど、なほ左もとすゑあひかなへり。よりてかつとす。

【通釈】

十八番 左勝 広季

35 神がここに天下られた昔から、雪は降り、年を重ねてきているのだ
ろ。——雪が積もっていると見える、古い玉垣よ。

右 広言

36 人はどうだか（知らないが）、わたしは進んで（雪を）踏むつもり
はない、——広田の社の広い神域の、浜に降った白雪を。

左の歌は、「そのかみよりやふりくらん」と詠んでいる、その心、
言葉が、詠み様を心得たものと思われます。

右の歌も、「神垣や広田の浜に」と詠んでいる姿は、結構に見え
ますけれども、やはり左の歌が、上の句と下の句がよく調和して
（優れて）いると思う。そのため左が勝ると判定する。

【注】○そのかみ 事のあった当時、昔。ここでは「天下る」に続け
て「神」をおわせてもいるのであろう。○ふりくらん 「ふり」は、
「降り」に「旧り」（歳月を重ね、の意）を掛けたのであろう。○人は
いさ 他の人はどうか知らないが。○われと 自分から進んで。○神
がきやひろたのはま 「神がき」は、神域を区切る垣の意から、神域
を言う。「ひろたのはま」は、広田神社の御前の浜であるが、ここで
は神域が「広」いことを掛けて言ったのであろう。○もとすゑ 歌の
上の句と下の句。

【考察】左の歌は、下句の「雪積もれりと見ゆる玉垣」について、上
句でさかのぼって社の起源に思いを及ぼし、神のここに天下られた昔
から「ふりくらん」と詠む。この「ふりく」は、雪が「降り」に掛け

て「旧り来」と言い、長い歳月を重ねて今に至っていることを思う心
を示したのであろう。

右の歌は、「広田の浜に降れる白雪」について、人は知らず、自分
は踏んで足跡をつけるつもりはないと詠む。一番右歌の、

朝まだき雪降りしける広前にあと踏みつけば神やいさめん
と同様、社前の雪に足跡をつけるのは神意にかなうことではないとの
心による作であらう。

俊成の判詞は、左歌については、「そのかみよりやふりくらん」と
詠んだのを、「心言葉いひしりて」と言い、心得た詠み様と評価する。

右歌についても、「神垣や広田の浜に」と詠んだのを、「姿はよろし
く」見えると評価する。しかし左歌が上下の句がよく調和して優れて
いると見られる点を重く見て、左の勝と判定する。

十九番 左勝 親重

37 ゆきふかみあけのたまどもうづもれてこころあてにぞたむけをばする

右 朝宗

38 ふみわけて人はとめきぬさかきばのかこそゆきのうづまざりけれ
左の、あけのたまどゆきにうづもれて、こころあてにたむけした
るこころ、右の、かこそゆきといへるすがた、ともによろし
くみゆれば、持と申すべし。

【通釈】

十九番 左勝 親重

37 雪が深く積もったので、み社の朱色の戸も埋もれて見え、およそ
の見当をつけて、幣をささげるのです。

右 朝宗

38 雪を踏み分けて、人は社を尋ねてきた、——（社の前の）榊の葉の
香りは、雪もうずめて隠すことができなかつたのだ。

左の歌の、社の朱色の戸が雪に埋もれて見えず、当て推量で神に
幣をささげた心、右の歌の、「（榊葉の）香をこそ雪の（うづまざ

りけれ)」と詠んだ姿は、ともに結構に見えるので、持としましよ
う。

【注】○あけのたまど 朱の玉戸。朱色の美しい(社の)戸。「たま」
は美称。○ころあてに 当て推量で。○たむけ 手向け。神に幣な
どを供えること。○とめきぬ 尋ねてきた。○さかきば 榊の葉。

「榊」は四番の注参照。

【考察】左右の歌は、ともに社殿をうずめるように降った深い雪を詠
み入れているが、左の歌は、朱色の目立つ社の戸も雪に埋もれて見え
なくなつて、当て推量で神に向かつて幣をささげる、と詠んでいる。

右の歌は、深い雪も社前の「榊葉の香」はうずめて隠すことができ
なかつたと見えて、社を「人はとめきぬ」と詠んでいる。これは榊葉
の香りを詠み加えているが、六番左歌の場合と同様、次の神樂歌によつ
たと思われる。

榊葉の香をかぐはしみとめくればやそ氏人ぞまとぬせりける
〔拾遺集〕五七七)

俊成の判詞は、左歌の心、右歌の「(榊葉の)香をこそ雪の(うづ
まざりけれ)」と詠んだ姿を、「ともによろしく見ゆれば」と評して、
持と判定している。

二十番 左勝

39 ゆきふればまつのはなさくしめのうちは神のころや春めきぬらん

右

伊 綱

40 しめのうちにたちまふきねも心せよおまへのゆきにあともこそつけ
左右させるなんなく優には待るにとりて、左まつの花をさかせて、
神のころや春めきぬらんといへる、いひしりてきこゆ。以_レ左

可_レ為_レ勝。

【通釈】

二十番 左勝

39 雪が降ると、松に花が咲くと見える社の境内は、神の心が春めいて

季 広

いることであろうか。

右

伊 綱

40 社の境内で舞う神職も、気を付けてくれ、——御神前の美しい雪に、
足跡がついてはと気に掛かる。

左右の歌は、これという欠点もなく優美に思われますが、それに
つけて言えば、左の歌で(雪を花と見て)「松に花咲く」と言っ
ておいて、「神の心や春めきぬらん」と詠んだのは、詠み様を心
得ていると思われる。左を勝とすべきであろう。

【注】○しめのうち 社の境内。神域。○たちまふきぬ 立って舞う、
神に仕える人。○あともこそつけ 足跡がついてはいけない。「もこ
そ」は係助詞を重ね、好ましくない事態を予測して気遣う気持ちを表
わす用法。○なんなく 難なく。欠点がなく。

【考察】左の歌は、雪が降ると「松の花さく」と見える社の境内は、
「神の心や春めきぬらん」と詠む。「松の花さく」は、松に掛かる雪を
花に見立てたもので、こういう先例は『金葉集』の次の贈答歌に見ら
れる。

ゆきつもる年のしるしにいとどしく千年の松の花さくぞ見る(三
二九、藤原師実)

返し

つもるべしゆきつもるべし君が代は松の花さく千たび見るまで
(三三〇、源頭房)

しかし境内の「松の花さく」ことから、「神の心や春めきぬらん」と
想像したのは、作者の手柄とも言える軽妙な運び様であろう。

右の歌は、社前の雪に足跡が残るのを望ましくないとする見方から、
「立ち舞ふきね」に「心せよ」と呼び掛ける形で詠んでいる。こうい
う見方の伝統があったことは、十七番右歌に関して、その「考察」の
中に記した。

俊成の判詞は、左右ともに「させる難なく優」であるとした上で、
特に左の歌が「松の花さく」ことから「神の心や春めきぬらん」と詠

んだ点を、「言ひ知りてきこゆ」と評価し、左の勝と判定している。

二十一番 左持

頭綱王

41 ぶりつもるゆきのしたぎえたるひしてたまぬきかくるしめのしらゆき
右 隆 親

42 ゆふかくる心ちこそすれしるたへに雪ふりつもるあけのたまがき

左、うたのころはをかしくみゆ。しめのしらゆきや、つねにきこえぬことのありつきて侍らん。

右、ことなるとがなく、いかに侍るを、又くのはじめ、なほめとまるにや。持と申すべし。

【通釈】

二十一番 左持

頭綱王

41 (注連繩に) 降り積もる雪の下が解け、つららとなって、玉を貫き掛けたと見える、——注連繩の白雪よ。

右

隆 親

42 白木綿を掛けたかと思われる、——真っ白に、雪の降り積もった朱の玉垣よ。

左は、歌の心は面白く思われる。「しめの白雪」は、平素耳にしない言葉が歌の中に入りこんだということでしょうか。

右の歌は、取り立てて言うほどの欠点はなく、優美に詠まれているのですが、さらに言えば、句の初め(に同じ文字を用いたところがあること)が、やはり問題と見られるかと思う。持としましゅう。

【注】○たるひして「たるひ」は垂氷^{たるとひ}。つららになって。○たまぬきかくる 玉を貫いて掛けている。○しめ 注連繩を、ここでは言ったのであろう。○ありつきて「ありつく」の一般的な意味は、住みつく、事に慣れるなどであるが、この場合どんな意味で言われているのか、明らかでない。仮に「通釈」のように解しておいたが、俊成の誤記の可能性も含めてなお検討を要すると思う。

【考察】左の歌は、社頭の「しめの白雪」について、その下の方が解けてつららになり、「玉貫きかくる」と見える様子を詠んでいる。「玉貫きかくる」という表現は、『金葉集』(四〇五)の「旅宿恋」の心を詠んだ藤原忠通の歌に用例があり、それは草枕での涙の玉について言ったものだが、これは注連繩のつららの様子を言っており、この点は珍しい。

右の歌は、「朱の玉垣」に白雪が降り積もった様子を、「木綿掛くる心地こそすれ」と詠む。こういう見立ては、先例があり、この歌合の「社頭雪」の歌でも、四番左歌ほか、数首の歌に見られたところである。

俊成の判詞は、左歌については、歌の心は「をかしく」見えるとした後、「しめの白雪」の語に関して意見を記している。この部分は「注」に記したように注釈上疑問の残る点があるが、「しめの白雪」という新しい用語を問題視したものかと思われる。

右の歌については、「ことなるとがなく、優」であると評した上で、「句の初め」のことに触れている。これは右歌の上下の句がともに「ゆ」で始まる点を、歌病(文字病)の観点から一応指摘したものであろう。

二十二番 左持

仲綱

43 けさみればきねがまるねのあとなれやいがきのうちのゆきのむらぎえ
右 故大炊御門右大臣家佐

44 けさみればはまのみなみのみやづくりあらためてけりよはのしらゆき
左右の、けさみれば、いづれもゆきのけしきめづらしくみえ侍り。

きねがまるねは、まことにさこそはとうたのすがたもみゆ。はまのみなみのみやづくりはまた、きよげにきこえ侍り。よりに又為侍。

【通釈】

二十二番 左持

仲綱

43 今朝見ると、神職の丸寝をした跡なのか、玉垣の内の雪が、所々消えている。

右

故大炊御門右大臣家佐

44 今朝見ると、浜の南の宮の造作を、新しく変えていた、——夜の間に降った白雪が。

左右の「けさ見れば」で始まる歌は、いずれも詠まれた雪の様子が目新しく見えます。(左の)「きねがまるね」の歌は、まことにさもあるうと、歌の姿としても思われる作です。(右の)「浜の南の宮づくり」の歌はまた、きれいに詠まれていると思われます。そこで、これも持とします。

【注】○まるね 丸寝。衣服を着けたまま、帯もとかず寝ること。○いがき 社の玉垣。○はまのみなみのみやづくり 「浜の南の宮」は、広田神社の境外撰社で、その造作。

【考察】左右とも「今朝見れば」で始まる歌で、前夜の様子に触れて詠んでいる。左の歌は、境内の雪が所々消えているのを、前夜「きねのまる寝」をした跡だろうと推量した作である。題材のとり上げ方として目新しいと言えるであろう。右の歌は、前夜降った雪のために、「浜の南の宮」の様子が一変して見えたことを詠んでいる。

俊成の判詞は、まず題材の雪に関してとり上げた方面が、左右ともに「めづらしく」見えることを挙げる。次に歌の姿の上で、左の歌は「きねのまる寝」を推量した着想が生かされている点を評価し、右の歌は社殿が雪におおわれた様子が「きよげに」詠まれている点を評価して、持と判定する。

二十三番 左

45 ゆきつもるみちわけそむる人をこそ神もあはれとおもひますらめ

右勝

季 定

46 いそちかき神のみむろにふるゆきやうみにしられぬなみのしらゆふ
左歌、このころ、あまたみゆるすぢには侍れど、すがたいうに

して、おもひますらめといへるすゑのくも、こころこもりて、いひしれるうたとみえたり。

右歌、いそちかきかみのみむろのゆきを、うみにしられぬなみのしらゆふといへる、いとをかしくきこえ侍れば、なほ右のかちと申すべくや。

【通釈】

二十三番 左

季 定

45 雪の積もる道を、初めて踏み分けて参る人は、神も感心なさることであろう。

右勝

広 盛

46 磯に近い神の社に降る雪は、海で知られていない、(別の)波の白木綿であろうか。

左の歌は、こういう着想は多く見られる類の事柄ですけれど、歌の姿が優美で、「(神もあはれと)思ひますらめ」と詠んだ下の句も、心がこめられ、詠み様をよく知っている人の歌と思われた。右の歌は、磯に近い神の社に降った雪を、「海に知られぬ波の白木綿」と詠んでいるのが、大層面白く思われますので、やはり右の勝と申すべきでしょうか。

【注】○みちわけそむる 初めて道を踏み分ける。初めて踏んで道を分けひらく。○神のみむろ 神の降臨される所。○なみのしらゆふ 波の白木綿。波の白く見えるのを白木綿に見立てた言葉。○いひしれるうた 歌の詠み様を心得ている人の詠んだ歌。

【考察】左の歌は、「雪つもる道」を初めて踏み分けて参る人を、神も「あはれ」と思われるであろう、と詠む。これは平兼盛の、

山里は雪降りつみて道もなしけふ来む人をあはれとは見む(『拾遺集』二五一)

の歌の心を、神の心にあてはめたような作である。

右の歌は、磯に近い社に降る雪を、「海に知られぬ波の白木綿」ととらえている。「○に知られぬ△」という言い方は、紀貫之の歌、

雪ふれば冬こもりせる草も木も春に知られぬ花ぞさきける（『古今集』三三三）

桜散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞふりける（『亭子院歌合』一三、『拾遺集』六四）

などに見られる。その場合、前者は雪を、春に知られない花に見立て、後者は花を、空に知られない雪に見立てている。すると右歌に「海に知られぬ波の白木綿」というのは、磯近い社に降る雪を、海に知られない「波の白木綿」に見立てたものであろう。「波の白木綿」の語は、俊成の歌、

いくかへり波のしらゆふかけつらん神さびにける住の江の松（『久安百首』八八二）

などと用いられ、海で波の白く見えるのを白木綿に見立てた語である。それを右歌では、磯近い社に降る雪が白木綿とも見られるところから、「波の白木綿」、ただし海で知られる「波の白木綿」とは異なるものとしてとらえたのであろう。ただ、右歌の場合の見立ては適切かどうか、疑問が残るようにも思われる。

俊成の判詞は、左歌については、着想がありふれたものである点を指摘するが、姿が優美で、下句も「心こもり」、「言ひしれる歌」と見えると評価している。

右歌については、「磯近き神のみむろの雪」を、海で知られているのとは別の「波の白木綿」に見立てて詠んだ点を、「いとをかしく」思われると高く評価し、右の勝としている。海の「波の白木綿」を『久安百首』（八八二）で自作の歌に詠んだ俊成として、この語の新しい用い方に興味を寄せることもあったかもしれない。

二十四番 左勝

47 神がきにしらゆふかけてふるゆきやあまつみそらのたむけなるらん
右 安心

48 神がきのはままつがえもいろかへてうらめづらしきけさのはつゆき

左右いづれもいひなれて、いうにはみえ侍るにとりて、うらめづらしきけさのはつゆきは、秋のはつ風などにききなれたるこちし侍れば、左の、あまつみそらのたむけは、たちまさるとや申すべからん。

【通釈】

二十四番 左勝

邦輔

47 社の垣に、白木綿しらゆふを掛けたと見えて降り積もる雪は、大空が（神に）供えた物であろうか。

右

安心

48 神域の、浜松の枝も（雪で）色を変えて、浜辺の様子が目新しく心を引かれる、今朝の初雪よ。

左右の歌は、ともに詠み慣れた様子で、優美に見えますが、それにつけて言えば、（右の）「うらめづらしき今朝の初雪」は、「うらめづらしき」秋の初風などの歌で聞きなれた感じがしますので、左の「あまつみ空の手向け」の方が勝っていると言わなければならないと思います。

【注】○神がき 神域を区切るため設ける垣であるが、神域を言うこともある。○あまつみそら 天あまつみ空。大空。○たむけ 手向け。神への供え物。○うらめづらしき 「うら」は心の意だが、ここでは浦を掛ける。浦の様子が目新しく感じられ、心を引かれる。

【考察】左の歌は、神垣に降り積もる雪を白木綿に見立て、それは神への大空の供え物かと詠んでいる。十二番右の季経の歌、

さかき葉に雪の白木綿とりしてでて空さへ神をまつるなりけりと同様の着想の歌である。

右の歌は、神域の浜松の枝が雪で色を変えたことを言って、「うらめづらしき今朝の初雪」と詠んでいる。これと似た下句をもつ先行歌に、『古今集』よみ人しらすの一首、

わがせが衣のすそを吹き返しうらめづらしき秋の初風（二七二）がある。題材は異なるが、右歌は多分この古歌の下句の形から影響を

受けたものであろう。

俊成の判詞は、左右ともに「言ひなれて、優」に見えると評した上で、右歌は下句が古歌で「聞きなれたる心地」がすると言い、対する左歌を勝としている。『古今集』の歌の「うらめづらしき秋の初風」の印象が強い以上、右歌は情景が違っても、二番煎じの感じが残るということであらう。

二十五番 左持

懐 綱

49 ふるゆきのゆふしでかくるむらすすみてぐらしろにたむけてぞゆく

右

僧 佑 盛

50 神がきのゆきつもるをばおしなべてふるのやしろと人やいふらん
左歌、すがたころめづらしくみゆ。むらすすみぞおもひがけぬ
たむけぐさなれど、みてぐらしろになどいへるけしき、うたよみ
のしわざなどいひつべし。又むらすすきのみてぐらしろも、かか
るものがたりの侍るなるべし。

右歌、神がきのゆきつもるをばといへるころことは、よろしと
いひつべし。よりて為_レ持。

【通釈】

二十五番 左持

懐 綱

49 降る雪が、木綿_{ゆうしで}四手を掛けたと見える群薄_{むらすすき}を、幣_{ぬさ}の代わりに、神
に供えて行くのです。

右

僧 佑 盛

50 神域で雪が降り積もるのを、皆一様に、ふるの社と人は言うことだ
らうか。

左の歌は、その姿、心が目新しく見える。「むら薄_{すすき}」は意外な神
への供え物だが、「みてぐらしろに」などと詠んだ様子は、ひと
かどの歌人のしわざとも言えるであらう。それに「むら薄」を
「みてぐらしろ」にするとというのも、このような物語がありそう
に思われます。

右の歌は、「神垣の雪つもるをば」と詠んだ心、言葉が、結構と
言えるであらう。そこで持と判定する。

【注】○ゆふしで 一番の「注」参照。○むらすすみ 群薄_{むらすすき}。群がっ
て生えるススキ。○みてぐらしろ 神に奉納する幣帛_{へいびやく}(ぬさ)の、代
わりにする物。○ふるのやしろ 今の奈良県天理市の「布留_{ふりゅう}」の地に
ある石上_{いそのかみ}神宮。ただし、ここでは「ふる」に(雪が)「降る」の意を
もたせて用いた。○たむけぐさ 神に供える物。

【考察】左の歌は、薄に白雪のかかったのを、幣帛に見立てて、幣帛
の代わりに神に供え、道中の安全を祈って行くとの心であらう。

右の歌は、神域で雪が降り積もるのを、布留_{ふりゅう}の社ならぬ「降るの社」
と人は言うことだろうか、と詠んだものであらう。

俊成の判詞は、左歌については「姿心めづらしく見ゆ」と概評した
上で、「むら薄」は意外な神への供え物のようなだが、それを「みてぐ
ら代_{しろ}」にしたというのは、表現に歌人としての能力が感じられるし、
情景が物語にもありそうだと評価している。

右歌については、「神垣の雪つもるをば」と詠んだ心詞を「よろし」
と評価している。ただ、この記述だけでは、俊成が右歌のどういう点
を評価したのか、よく分からない。

二十六番 左

懐 能

51 神がきやおまへのはまのまつがうれをふぶきにあらふゆきのしらなみ

右勝

憲 経

52 ふりもあへずには火のまへにとけゆくは神のころもゆきとしれとや
左、まつがうれをふぶきにあらふなどいへる、たけあらんとよめ
るうたなるべし。

右、ふりもあへずとおきて、神の心もゆきとしれとやといへるこ
ころ、いとをかしきこえ侍り。右のかちと申すべし。

【通釈】

二十六番 左

懐 能

51 神域の、御社前の浜の松の、下枝を白波が洗うように、こずえを白雪がふぶいてゆく。

右勝

憲 経

52 雪が降りも終わらず、庭火の前で解けてゆくのは、(神楽で) 神の心も解けたことを告げる証^{あか}してであろうか。

左の歌は、「松がうれを吹雪^{あか}にあらふ」などと詠んでおり、これは格調の高さを目指して詠んだ歌なのであろう。

右の歌は、「降りもあえず」と歌い始めて、「神の心もゆきと知れとや」と詠んだ心が、大層面白く思われます。右の勝と判定しましょう。

【注】○まつがうれ 松のこずえ。「末^{うれ}」は、木の枝、草の茎や葉などの先端。○ゆきのしらなみ 雪を白波に見立てた表現。○ふりもあへず 降りも終わらぬうちに。降るや否や。○には火 庭でたく火のことであるが、特に神楽を奏する時、照明のためにたくかがり火を言う。○こころもゆき 「心も行き」に「雪」を掛けた表現。「心行く」は、心がとけて満足する意。○たけ 歌論用語としては、格調の高さを言う。「たけ高し」「たけあり」などと用いられ、一般にのびやかな表現のうちに精神的に張りつめた高いものが感じられる歌の特徴として言われているようである。

【考察】左の歌は、社前の浜の松のこずえに雪が風を受けて降りかかる様子を、「ふぶきにあらふ雪の白波」と詠んでいる。これはその用語から見て、源経信の歌、

沖つ風吹きにけらしな住吉の松の下枝^{しづえ}をあらふ白波 (『後拾遺集』

一〇六三)

によって詠んだかと思われる。経信の歌が、住吉の浜松の下枝を白波が洗う様子を詠んでいるのを下敷きにして、左歌は広田の浜松のこずえを雪がふぶいてゆく様子を、「ふぶきにあらふ雪の白波」と表現したのであろう。ふぶく雪を白波に見立てた表現である。

右の歌は、雪が庭火の前ですぐ解けるのは、「神の心もゆきと知れ

とや」と詠んでいる。庭火は神前に奏する神楽の照明用のかがり火を言ったと思われる。「神の心もゆき」は、雪に掛けて、神の心がとけて満足することを言ったと見られるから、一首は、雪が庭火の前ですぐ解けるのは、神楽によって神の心もとけたことを示すものか、との心であろう。

俊成の判詞は、左歌については、「たけあらんと詠める歌なるべし」と評する。「たけ」、格調の高さを目指した点に一首の特徴を認めているが、その目標が実現されたとは言っていない。経信の「松のしづ枝をあらふ白波」の歌に認められる「たけ」などに比べて、見劣りがあることもあったかと思う。

右歌については、歌の心を「いとをかしく」思われると評価し、勝と判定している。

二十七番

左勝

智 経

53 たまがきのうちへはいらじふるゆきをふままくをしと神もこそみれ

右

経 尹

54 にはのゆきはおまへのはまにおもなれてこずえを神やめづらしとみる
左、めづらしきさまにはあらねど優に待めり。

右、おまへのはまのいさぎよきに、ゆきにしもおどろかれぬころは、いとをかしくも侍るを、こずえをといへるや、まつなどい
はではいかがとおぼえ侍れば、左とがなきにつきて勝つべきにや。

【通釈】

二十七番 左勝

智 経

53 玉垣の内へは足を入れないようにしよう、——降り積もった雪を踏んでは惜しいと、神も御覧になるはずだ。

右

経 尹

54 庭の雪は、御社前の(清浄な白砂の)浜で見慣れた景とも思われ、こずえの雪を、神は目新しいと御覧になるかと思う。

左の歌は、目新しい詠み様ではないけれど、優美な作のように思

います。

右の歌は、御社前の浜が清浄なので、特に雪の景色に対して心を動かされないとする心は、大層面白いのですが、「こずゑを」と言ったのは、松などの言葉がないとどうかと思われまので、左の歌が欠点がないところから、左の勝となろうかと思えます。

【注】○ふままくをし「まく」は、推量の助動詞「む」のク語法。

「踏まむこと惜し」の意。○おもなれて 面慣れて。見慣れて。○いさぎよき 清浄な。

【考察】左右の歌は、ともに社頭の雪を神がどのように見るかをとり上げている。無論その場合の神の心は作者の想像によるものである。

左の歌では、社頭の雪を踏んで足跡をつけては惜しいと神は見るとする観点から、「玉垣の内へは入らじ」と詠む。このような観点が伝統的な通念に基づくと思われることは、十七番の「考察」の中で触れた。

右の歌では、社前の雪に対して、神は（清浄な白砂の）浜の風景を見慣れているので特に心を動かさず、こずゑ（の緑）が白雪におおわれた様子を「めづらしと見る」ことであろうと詠んでいる。

俊成の判詞は、左の歌については、目新しい歌い様ではないが、「優」であるとする。

右歌については、神は社前の浜の清浄な（白砂の）風景を見慣れているだけに、庭の雪にはさして心を動かされないと詠んだ心を、「いとをかしく」思われると評価する。しかし、「こずゑを神やめづらしと見る」と詠んだのは、やはり松のこずゑとでも言うべきだろうと指摘し、対する左歌は欠点がないという理由で左の勝としている。

二十八番 左持

55 はふりががさすさかきばにふるゆきをちりてみだるぬさかとぞみる

右

僧浄縁

56 たとふべきかたこそなけれひろまへのはままつがえにふれるしらゆき

左はめづらしく、右はとほしろし（群書類従）すがたはかはれど、うたのほ

どおなじ。持と申すべし。

【通釈】

二十八番 左持

阿闍梨アツリ大法師ダフシ阿

55 神職の挿した榊の葉に、降りかかる雪を、散り乱れる幣ぬさかと思つて見るのです。

右

僧浄縁

56 例えようもなく、すばらしい、——御社前の、浜松の枝に降り積もつた白雪よ。

左の歌は目新しく、右の歌はおおらかに詠まれている。その姿は異なるけれど、歌の程度は同じである。持としましよう。

【注】○はふりこ 神職。○さすさかきば 挿す榊葉。「神垣にさす

さかき葉のゆふよりも花に心をかくる春かな」『顕綱集』四二、「天の下のどけかれとやさかき葉を三笠の山にさしはじめけむ」『千載集』

一一六〇、藤原清輔）などの用例によると、神域に榊を挿して神を祭ることを言うことと見られる。○ちりてみだるぬさ 散り乱れる幣。

「ぬさ」は神に祈る時に供える物で、木綿・麻・紙等で作られ、旅行の折などには、これを四角に細かく切って幣袋ぬさに入れて持参し、道祖

神の前にまき散らして手向けた。ここでは、そういう幣の細片が散り乱れる様子を言ったのであろう。○とほしろし 四番の「注」「考察」

参照。

【考察】左の歌は、社前に挿す榊に降りかかる白雪を、「散りて乱るぬさ」に見立てて詠んでいる。右の歌は、社前の浜松の枝に降り積もった白雪の景を、「たとふべき方こそなけれ」と詠む。単純で大まかな詠み様である。

俊成の判詞は、左右それぞれの特徴を、「左はめづらしく、右はとほしろし」と評した上で、歌の姿は異なるが、歌としてのレベルは同じ程度であるとし、持と判定している。

なお、右歌に対する評語「とほしろし」は、四番左歌、

おしなべて雪の白木綿かけてけりいづれ榊のこずゑなるらん

に対しても用いられていたが、並べて見ると、かなり歌の価値に相違がありそうである。この点は、俊成も意識していたと思われるので、四番左歌については、

心姿、まことにとほしうく、詠まほしきさまにも侍るかな。……
風体足^二嗟嘆^一。

と高く評価して勝と判定していたが、この二十八番右歌については賞賛の言葉を記さず、「めづらしく」見える左歌と同程度の作としている。したがって作品の評価とは別に、歌の姿の特徴に関して、「とほしうし」の語を俊成は用いているのであろう。

二十九番 左勝

前斎宮中納言

57 神がきのさかきばごとにゆふかけてふるしらゆきぞなれたむけする

右

素 覚

58 ゆきのいろをきねやかさねてしらげたるおまへのはまはめこそおよばね
左歌、ふるしらゆきぞなれたむけするといへるころ、いとをかしくこそきこえ侍れ。

右歌は、かの神まつるうづきにさけるといへるふることおもひいでられて、これもひとつのすがたには侍れど、なほうたのすがた難^二相似^一。以^レ左可^レ為^レ勝。

【通釈】

二十九番 左勝

前斎宮中納言

57 神域の榊葉のそれぞれに、木綿を掛けたと見えて降る白雪は、おまえ自身を神にささげているのだ。

右

素 覚

58 雪の色を、きね（神職）が重ねて白くしているのか、御社前の浜の白一色の見事さは、到底見尽くすことができない。

左の歌は、「降る白雪ぞ汝^{なれ}手向けする」と詠んだ心が、大層面白くと思われま。

右の歌は、あの「神まつる卯月にさける（卯の花は白くもきねが

しらげたるかな）」と詠んだ古歌が思い出されて、これも歌の一つの姿ですけれども、やはり歌の姿として他と同列に見るのは難しいと思う。左を勝としようと思います。

【注】○ゆふ 木綿。四番の「注」参照。○なれ 汝。おまえ。ここでは白雪を擬人化して言う。○きね 神職（限定すれば巫女）を意味する「きね」に、米をつく「杵」を掛ける。○しらげたる 「しらぐ」は、（神に供えるために、米をついて）精白する。○めこそおよ

ばね（雪の浜の景が）あまり見事なので、いくら見ても見尽くせない思いがする。○神まつるうづきにさけるといへるふること 「神まつる卯月にさける卯の花は白くもきねがしらげたるかな」（『拾遺集』九一、凡河内躬恒）

九一、凡河内躬恒

【考察】左の歌は、榊に降りかかる白雪を、白木綿を掛けたのに見立てている点では、類例が多いが、白雪を擬人化して「汝」と呼び、白雪が自身を神に手向けていると詠んだ点で、異色の作であろう。

右の歌は、社前の浜が白一色に雪で包まれた景を賞賛した作であるが、上句に「雪の色をきねや重ねてしらげたる」と詠んだのは、俊成が判詞に言及しているとおり、凡河内躬恒の歌、

神まつる卯月にさける卯の花は白くもきねがしらげたるかな
（『拾遺集』九一）

の下句によったと思われる。題材としては、躬恒の歌の卯の花が右歌では白雪に変わっているが、神職を意味する「きね」に「杵」を掛け、神職が神に供える米をつき精白することを織りこんだ技巧は、そのまま用いている。

俊成の判詞は、左歌については、下句の心を「いとをかしく」と評価している。右歌については、基づいたと思われる躬恒の歌を挙げ、これも歌の「一つの姿」ではあるが他の歌体と同列に置き難いと言っている。掛詞による面白さを眼目とした点に関する指摘であろう。なお、これを「一つの姿」と認めたのは、『和歌体十種』に挙げる「両方致思体」が念頭にあったのではないかと思う。

海上眺望

一番 左勝

按察使公通

59 あさばらけあしやのおきをゆくふねのよそめはかものゐるかとぞみる

右

大式重家卿

60 なみまよりほのみどりにぞみえわたるこやすみよしのまつのむらだち
左歌、あしやのおきをゆくふねのなどいへるすがた、をかしくも
侍るかな。

右歌、ほのみどりにぞみえわたるといひて、こやすみよしのまつ
のむらだちと侍る心、又いとよろしくきこえ侍るを、かしこにみ
ゆる事を、こやとはよみて侍らんや。かれやとぞいはまほしくお
ぼえ侍る。

左なほ、あしやのおきのふねをかものゐるかとまがへられ侍らん
ころは、まさるべくやとみえ侍。いかが。

【通釈】

海上眺望

一番 左勝

按察使公通

59 夜明け方、芦屋の沖を行く船が、よそ目には鴨の（波間に小さく）
浮かんでいるかと思えた。

右

大式重家卿

60 波間に、ほのかな緑に見わたされる、——これは、住吉の松の林な
のだ。

左の歌は、「芦屋の沖を行く船の」などと詠んでいる姿が、実に
面白く思われます。

右の歌は、「ほの緑にぞ見えわたる」と言っておいて、「こや住吉
の松の群立ち」と詠まれています心が、これも大層結構に思われ
るのですが、離れた所に見えるのを、「こや」（これは）と詠んで
よいでしょうか。「かれや」（あれは）と言いたいものと思われる
のです。

左の歌はやはり、芦屋の沖の船を鴨が浮かんでいるのかと、つい
見誤ったように詠まれています心の点で、勝るであろうかと思
れます。いかがでしょうか。

【注】○あさばらけ 夜の明けてゆくころ。『万葉集』（三五四等）に見
える「朝開き」（停泊していた船が早朝出発すること）から出た語。
○あしや 摂津の国の歌枕。今の兵庫県神戸市東部から、芦屋市・
伊丹市などにわたる一帯の地名。六甲山の南斜面に当たり、前方に海
が開ける。○かも 鴨。ガンカモ科の鳥の中で比較的小形の水鳥の総
称。○ほのみどり ほのかな緑色。○こや 代名詞「こ」に、感動を
示す助詞「や」の付いた語形。○すみよし 摂津の国の歌枕。今の大
阪市住吉区のあたり。住吉神社の所在地で、松のある海辺の地として
歌材とされることが多い。○むらだち 群立ち。草木が群生している
こと。

【考察】「海上眺望」の題意を生かすには、眺める海の広さに対して、
視線の中心となる物の小ささを描きだすことが、効果的な手法の一つ
になりうるであろう。左の歌は、その手法によった作で、明け方芦屋
の沖を行く船が、よそ目には鴨が波間に浮かぶかと思えたと思む。鴨
が小形の水鳥であるだけに、沖の船の小さい姿が印象的に伝わるこ
ろがあると思ふ。

右の歌は、視線の中心となる物がかすかに見える様子をとらえて、
見る人からの海上の隔たりの遠さも伝えようとしている。まず波間に
「ほの緑」に見渡される所があると言ひ、次にこれは海を隔てた住吉
の松林だろうと推量した作である。

俊成の判詞は、左歌の姿について「をかしく」思われると評した後、
右歌については、その心は「いとよろしく」思われるけれど、離れた
所に見えるのを「こや」（これは）と言った表現は適切でないと思
っている。そして左歌の特長として、沖の船を鴨と見まがえた心を挙
げ、左が勝ると判定している。最後に「いかが」と言い添えたのは、
右歌の作者が重家であることを配慮したところもあるだろうか。

二番 左持

前大納言実定

61 むこのうみをなぎたるあさにみわたせばまゆもみだれぬあはのしまやま
右 頼政朝臣

62 わたつうみをそらにまがへてゆくふねもくものたえまのせとにいりぬる

左、ことばをいたはずして、またさびたるすがた、ひとつの体
に待めり。まゆもみだれぬあはのしま山といへる、かの黛色
廻臨蒼海上ハルカニソノミサウカイウヘニといひ、竜門翠黛眉相對リウモンスイタイハマエヒムカヘリなどいへる詩おも
ひいでられて、幽玄にこそみえ侍れ。

右又、そらにまがへてゆくふねもといへる、ころろふかく、かす
めるこちして、くものたえまのせとにいりぬらんほども、おろ
かなる心およびがたくして、勝劣不分明ニ。よりて為持。

【通釈】

二番 左持

前大納言実定

61 武庫むくの海を、ないだ朝に見渡すと、青いまゆずみさながらの、整つ
た形の阿波あわの山影が眺められた。

右

頼政朝臣

62 海原を空に続くかと思えて、はるかな沖をこいで行く船は、雲の絶
え間の瀬戸に入り、姿を消していった。

左の歌は、用語の面にあまりこだわらず詠んでおり、さびた姿で、
一種独特の歌体であるようです。「まゆも乱れぬ阿波の島山」と
詠んでいるのは、あの「黛色廻臨蒼海上」と詠んだ詩とか、
「竜門翠黛眉相對」と詠んだ詩とかが思い浮かべられて、幽玄に
見えます。

右の歌もまた、「空にまがへて行く船も」と詠んでいるのは、思
い入れが深く、定かにとらえきれないところがあると思われ、
「雲の絶え間の瀬戸に入りぬる」という様子も、未熟な私の心に
は及び難いものがある、優劣を決めかねます。そのため持と
します。

【注】○むこのうみ 武庫むくの海。「武庫」は今の西宮市・芦屋市・神

戸市あたりの、六甲山の南側の土地で、その前の海。○まゆもみだれ
ぬあはのしまやま 美女の青いまゆ墨さながらの美しく整った阿波の
山。ただ実際は阿波より手前の淡路島が見えるはずである。○わたつ

うみをそらにまがへてゆくふね 海原を空に続くかと思えてこいで行
く船。はるかな沖を行く船が、海と空との境目もはっきりしないあた
りに見える様子あるう。○くものたえまのせとにいりぬる 雲の絶え

間の瀬戸に入った。「瀬戸」は海峡のことであるが、ここでは雲の切
れめを「瀬戸」と見なしたものであるう。○さびたるすがた 俊成の
用いたこの語について、岡崎義恵氏は「歌詞がやや古風で落着きがあ

り、静かな深い感じを与へるやうな場合に言つてゐるやうである」
〔「わび」と「さび」——『美の伝統』所収〕とされた。○黛色廻臨蒼
海上 まゆずみのような山は、はるかに青海原のほとりに姿を見せて

いる。『千載佳句』・『和漢朗詠集』に収められた賀蘭遂の「百丈山」
の中の語句。○竜門翠黛眉相對 竜門山は青いまゆずみのような山が、
向かい合うと見える。『白楽天詩後集』巻十一に見える「五鳳楼晚望」

の中の語句。○幽玄 基本的には、奥深さ、あるいは世俗から隔たる
遠さを表す語であるう。

【考察】左の歌は、朝なぎの武庫の海のかなたに見える阿波の山影を
「まゆも乱れぬ」と形容している。俊成が判詞に引用するような語句
を背景にして、美女の整った青いまゆずみのイメージを、遠い阿波の
山影に重ねて表現したのである。用語の上では小細工をせず、のびや

かな歌い様をしている。

右の歌は、広い海を空に続くかと思えて沖を行く小舟に視線を向け、
それが「雲の絶え間の瀬戸に入りぬる」と詠んでいる。これは雲の絶
え間を瀬戸と見なし、そこに小舟が入って姿を消していった様子を詠
んでいるのであろう。海と空との作る広大な空間の中で小舟の姿を
印象づける一首である。

俊成の判詞は、左歌については、「ことばをいたはず」と言うの

と併せて、「さびたる姿」と評し、これを一種独特の歌体としている。「ことばをいたはらず」とはこの場合、用語上小細工をしていない点を言ったのであろう。そして、その古風とも見られる簡素で落ち着いた一首の詠み様を「さびたる姿」と評しているように思う。俊成の「さび」の評語の現存する用例としては、『住吉社歌合』社頭月八番判詞に続く、二例目の用例になる。

一方、俊成は左歌の下句「まゆも乱れぬ阿波の島山」を挙げて、青いまゆずみで山影を形容した詩句が思い浮かべられ、「幽玄」に見えると評している。これは端麗な美女のまゆずみのイメージを重ねて、現実を超えた美しさを感じさせるような点を、「幽玄」と評したかと思う。俊成の「幽玄」の評語の現存する用例としては、『重家朝臣家歌合』花二番判詞、『住吉社歌合』旅宿時雨二十五番判詞の前列に続く、三例目の用例になる。そして前の二例の「幽玄」が幽遠あるいは幽寂な境地にかかわり、俊成の師の基俊の用いた「幽玄」の影響が見られるのに対して、これは先例の影響から離れており、俊成が「幽玄」の評語を新しく使い生かしているのが注目される。

右歌については、俊成は上句を挙げて、「心深く、かすめる心地して」と評している。(この言葉は、「……心、深くかすめる心地して」と見る説があるが、今は用いない。その理由は小著『幽玄』——用例の注釈と考察』に述べた。)作者の思い入れが深く、詠まれた内容が定かにとらえきれないことを言ったのであろう。また歌の下句を挙げて、判者の「心及びがたく」とするの、同様の意味であろう。

三番

左勝

小侍従

63 あまつそらくもゐやうみのはてならんこぎゆくふねのいるとみゆるは
右 権大納言実房

64 わたのはらなみちたゆたふくもまよりほのみえわたるあはぢしまやま
左歌、こころすがたよろしくこそみえ侍れ。

右歌又、なみちたゆたふくもまよりといへるすがたことば、いづ

れもいとをかしく、おもひみだれ侍るを、あはぢしま山と侍るや、かみのくのすゑにてはすこしちかくやきこえ侍らん。よりて左のくもるやうみのといへるは、なほまさるとや申し侍るべからん。

【通釈】

三番 左勝

小侍従

63 大空の、雲のあるあたりが、海の果てであろうか、——こいでゆく船が、雲に入ると見えるのは。

右

権大納言実房

64 海原の波路に揺れ動く雲、その絶え間から、かすかに見渡される、淡路島の山影よ。

左の歌は、その心、姿が結構に見えます。

右の歌も、「波路たゆたふ雲間より」と詠んだ姿、言葉が結構で、左右ともに大層面白く、いずれを勝るとするか、思い迷うのです。しかし(右の歌で)「淡路島山」と言っていますのは、上の句を受けた下句としては少々近過ぎる所と見られるでしょうか。そこで、左の歌の「雲居や海の(はてならん)」と詠んでいる方が、やはり勝ると言うべきだろうかと思えます。

【注】○くもる 雲居。雲のある所。○なみち 波路。海上の船の通る路。○たゆたふ 定めなく揺れ動く。○あはぢしまやま 淡路島山。

淡路島は『万葉集』以来の歌枕。今は兵庫県に所属。

【考察】左の歌は、沖をこいでゆく船がやがて雲に入ると見えるのによれば、大空の「雲居」が「海の果て」であろうか、と詠む。前の二番右歌と似た情景をとらえた歌で、海原の大空に続く見えるあたりの、雲の中に姿を隠す小船に視線が向けられている。

右の歌は、海原の波路にたゆたう雲の間に、かなたの淡路島の山影が「ほの見えわたる」様子を詠んでいる。

俊成の判詞は、左歌について、「心姿よろしく」見えると言い、右歌についても「姿言葉」を肯定して、左右とも「いとをかしく」、優劣の判定に迷うと言っている。しかしその上で、右歌の問題点として、

上の句「わたのはら波路たゆたふ雲間より」を受けてかすかに見える存在としては、「淡路島山」では近過ぎると指摘し、その点から左の勝と判定している。海を隔てた淡路島が雲の具合で見えたり見えなかつたりするのが事実でも、歌としては、上句の表現にふさわしい遠くかすかな存在が望ましいと、俊成は考えたのであろう。

四番 左

65 まつらぶねみえゆくほどはそれながらただえや都への(群書類従)ゑのきぎぞたえぬる

右勝

師光

新大納言実国

66 あさなぎのしほちはるかにいでにけりかもめにまがふおきのつりぶね
左の、まつらぶねみえゆくほどはそれながらえや都への(群書類従)ゑのきぎたえぬらんほど、こころぼそくは待るを、右の、しほちはるかにいでにけりといへるすがた、よろしくきこえて、眺望のころなほまされるにや侍らん。よりにて以^レ右為^レ勝。

【通釈】

四番 左

新大納言実国

65 松浦船まつらぶねの、見えて遠ざかるうちは、それと分かるが、もう掛け声は聞こえなくなつた。

右勝

師光

66 朝なぎの潮路を遠く、船が出たことだ、——波間のかもめかと思見える、沖の釣船よ。

左の歌の、「松浦船見えゆくほどはそれながら……えや声の聞き絶えぬ」と詠まれた様子は、心細いことではありますが、右の歌の、「潮路はるかにいでにけり」と詠んだ姿は、結構に思われて、(海上を)眺望する心が一層まさつていようかと思えます。そのため、右を勝とします。

【注】○まつらぶね 松浦船。肥前の国(今の佐賀・長崎県)の北西部の松浦地方で作られた船。『万葉集』の歌に用例(二四七・三二七)が見える。○それながら そのまま(の姿)だが。○えやゑ エン

ヤという(船をこぐ時の)掛け声であろう。ただ文献上他の用例を見ない。群書類従本では、この部分は「都へ」とある。○しほち 潮路。潮の流れる道筋。海路とも。「潮路はるかに」という表現は平安時代後期から歌語として用いられたよう、『千載集』に用例(五三〇、一〇四九)がある。

【考察】左の歌は、遠ざかってゆく松浦船が、姿は元のままに見えるが、船をこぐ折の掛け声はもはや聞こえなくなつた、という歌意であろう。海上はるかに去つてゆく船を見送る立場で詠んだ作で、俊成が判詞に言うように、心細い感じを伴う。「松浦船」の語は、『万葉集』の歌に用例(二四七・三二七)があるが、「松浦」の地名とこの歌の情景から思い浮かべられるのは、『万葉集』の歌(八七五・八七九等)に詠まれている、松浦佐用姫の伝説であろう。松浦佐用姫が、大伴狭手彦が任那に派遣される折に乗った船を、山上で見送り、別れを悲しんで領巾を振つたという伝説である。左歌も、この伝説を背景にして詠まれた可能性が考えられそうである。

右の歌は、朝なぎの潮路をはるかにこぎ出した沖の釣船が、波間にかもめのように見えた、と詠んでいる。これと似た表現をもつ眺望の歌に、『千載集』の円玄法師の、

難波がた潮路はるかに見たせばかすみ浮かぶ沖の釣船(一〇四九)

の一首もあるが、沖の小船を波間の鳥に見まがうものとして詠んだ点では、この歌合の海上眺望一番左の藤原公通の歌、

朝ぼらけ芦屋の沖を行く船のよそめは鴨のゐるかどぞ見ると共通するところがある。「海上眺望」を題として詠むと、こういう点で似た歌が出るのは、ある程度やむを得ないことかもしれない。

俊成の判詞は、左歌について、「心細く」と評するが、右歌について、「潮路はるかに出でにけり」と詠んだ姿を「よろしく」思われると評し、「眺望の心なほまされる」点で右の勝としている。

五番 左勝

観蓮

67 なみのうへにうかぶこのはとみゆるかなきぎはなれゆくあけのそほぶね

右

左大弁実綱

68 うすぐものかかるなみちをみわたせばまだいろどらぬゑまじまりけり

左歌、なみのうへにうかぶこのはなどいふころは、ききなれたる事に待れど、あけのそほぶねは、このはもいろいろある心ちして、をかしくみえ侍り。

右歌、なみちくもへだてて、ゑじまいまだいろどらずみゆらん心よるべありて(群書類從)ころも、ゆるありてきこえ侍れど、なほ左いささかまされるにやとおぼえ侍れば、左のかちと申し侍るべし。

【通釈】

五番 左勝

観蓮

67 波の上に浮かんだ、木の葉と見える、——こいで遠ざかってゆく、赤い船よ。

右

左大弁実綱

68 薄雲のかかる波路を見渡すと、まだ彩らない絵のような、絵島の姿があった。

左の歌は、「波の上に浮かぶ木の葉」などに船を例えた着想は、聞き慣れたことですが、船が「あけのそほ船」となると、木の葉も色の美しいものを感じられて、面白い作と見受けられます。右の歌は、波路を雲が隔てて、絵島がまだ彩色していない絵のように見えるという着想で、これも風情のあることと思われませんが、やはり左の歌が少々まさってはいかがでしょうかと思われまますので、左の勝と判定しましょう。

【注】○あけのそほぶね 赤く塗った船。「そほ」は赤土。『万葉集』

に「旅にしている恋しきに山下の赤乃曾保船沖にくぐ見ゆ」(二七〇、高市黑人)の歌がある。船を赤く塗る目的は、船体保護、装飾、官船の目印、魔よけなど、諸説がある。○いろどらぬ絵島 彩色していない絵のような絵島。絵島は、淡路の国の歌枕で、淡路島の北東部、今

の兵庫県津名郡淡路町岩屋の、磯にある小島。

【考察】左の歌は、海上を遠ざかる「あけのそほ船」が、波の上に浮かぶ木の葉と見ると詠む。「あけのそほ船」の語は、「注」に引いた『万葉集』の高市黑人の歌(二七〇)を一首の背景に感じさせ、併せて沖の船を色彩的に印象つける意図で使われたものかと思う。この語を復活させて歌を詠むことは、このころ以後には珍しくないが、これ以前では俊頼の『散木奇歌集』の歌(一三一八)がやや人目を引く程度かと思うので、この左歌は当時は特に新鮮な感じをもったかもしれな

い。右の歌は、視線を向けた対象の色彩を否定した作で、薄雲のかかる波路のあなたにかすかに見える絵島を、「まだいろどらぬ絵島なりけり」と詠む。情景としては三番右の実房の、

わたのはら波路たゆたふ雲間よりほの見えわたる淡路島山の一首と似ているが、この五番右歌で「いろどらぬ絵島」と掛詞仕立てでとらえたのは、作者の工夫の跡を示している。

俊成の判詞は、左歌については、「あけのそほ船」の語を詠み生かした点を認め、「をかしく」見るとする。右歌については、波路を雲が隔てて「いろどらぬ絵島」と見るとした着想を「ゆるあり」と評価するが、比較すれば左の方が「いささかまされるにや」と判定している。

【備考】五番左歌は『続拾遺集』(一一二五)に収められている。

六番 左

三河内侍

69 わたのはらおきつ風ふくゆふなみにあるかなきかとみゆるつりぶね

右勝

宰相中将実守

70 なごのうみにたつともみえぬをしかもやとほざかりゆくあまのともぶね
左、もじつづき、ことばづかひはをかしく侍るを、右の、あまのともぶねをしかもとみゆらんころをかしく、ともといふもじいひしりてみえ侍るうへに、左のおきつ風ふくらんゆふなみは、な

ほしつかならずやとみえ侍れば、右のかちと申すべきにや。

【通釈】

六番 左

69 海原に、沖の風が吹き、立つ夕波の間に、あるかないか、わずかに見える釣船よ。

右勝

宰相中将実守

70 なごの海に、飛び立つとも見えないおしどりが、と思ったのは、遠ざかってゆく(二つ) 連れだつ漁船だった。

左の歌は、文字の続け様、言葉の使い様は面白いと思いますが、右の歌の、「あまの友船」がおしどりと見えると詠んでいるのは、着想が面白く、「友」という文字(の用い方)が歌の詠み様を心得たものに思われます。その上、左の歌の「沖つ風」が吹いて「夕波」が立つと詠んだのは、やはり穏やかでない様子(で「海上眺望」の歌としてあまりふさわしくない)かと見受けまますので、右の勝と言うべきかと思うのです。

【注】○おきつ風 沖を吹く風、または沖から吹いてくる風。○なごのうみ 越中または摂津の国の歌枕。『万葉集』以後その用例が見られる。越中の用例としては、越中の守であった大伴家持の「奈呉の海の沖つ白波しくしく思ほえむかも立ち別れなほ」(『万葉集』三九〇―三九一)等の歌があり、これは今の富山県新湊市の放生津潟あたりの海とされている。摂津の用例としては、「任吉の名児の浜べに馬立てて玉拾ひしく常忘らえず」(『万葉集』一一五七)の歌によって、今の大阪市住吉区あたりの前の海と考えられている。しかし当面の六番右歌の場合には、摂津でも広田社に近い海を詠んでいると思われる。すると、「名児の海を朝こぎくれば海中に鹿子を鳴くなるあはれその鹿子」(『万葉集』一四二七)の歌が、逸文『摂津国風土記』などに見える夢野(古名、刃我野。今の神戸市兵庫区の一部)の鹿が淡路島北部の野島との間の海を渡ったという伝説と、関係があるとも見られることなども参照すると、「なごの海」は大阪湾の北部一帯を広く言う名称だったので

あるまいか。○をしかも オシドリの異名。雌雄が離れず仲むつまじい水鳥として歌材にされることが多い。○あまのともぶね 漁夫の操る友船。「友船」は、連れ立って航行する船。

【考察】左右の二首は、ともに海原の中に遠く小さく見える漁船をとり上げているが、左の歌は、風で夕波の立つ中にわずかに姿が認められる釣船に視線を向けている。

右の歌は、なごの海の波間におしどりのつがいが見えると思ったのは、遠ざかってゆく「あまの友船」だったと詠む。着想の巧みさに特色を示した作であろう。

俊成の判詞は、左歌は「文字続き、言葉づかひ」が「をかしく」思われるのに対し、右歌は「心をかしく」思われるとし、「あまの友船」がおしどりのつがいに見えたという着想と表現を評価する。さらに左歌の問題点として風浪の風景を詠んだことを言い添えるが、これは「海上眺望」の題にあまりふさわしくない点を指摘したのである。それで右の勝としている。

七番

左勝

僧俊恵

71 くものなみわけゆくふねのきえぬるはあまのかはらにこぎやつける

右

皇太后宮大夫俊成

72 わたのはらこぎはなれぬるふなちにはころもえこそつながざりけれ
左歌、あまのかはらにこぎやつけるといへるころ、かの張博望之到^{ウツクハシ}牛漢^{ウシノカミ}浜^{ハマ}二十万里之濤^{ニウマンリノナミ}といふ句のころをとられて侍り。いとをかしくこそ侍れ。

右歌は又愚老の拙歌に侍るべし。さのみ判者の威をかりて、とがをあらはさず侍らん、神慮おそれあるべし。ころつながれずといへるばかりは、眺望の心さだめてすくなく侍らんかし。左歌のころまことに万里のなみおもひやられて、はるかにこそおぼえ侍れ。よりにて以^レ左^ヲ為^シ勝^ス。

【通釈】

七番 左勝

僧俊恵

71 はるかに雲の波を分けて行くと見えた船が、姿を消したのは、天の川の川原にこぎ着けたのであろうか。

右 皇太后宮大夫俊成

72 海原をこいで遠ざかった船の、はるかな船路に心を引かれ、心を（わが身に）つなぎ止めておけなくなった。

左の歌で、「天の川原にこぎやつけた」と詠んだ心は、あの「張博望之到^リ牛漢^ニ 派^ニ 十万里之濤^ニ」という句の心をとり入れられています。大層面白いと思います。

右の歌はまた、私のつたない歌です。いちずに判者の威光をかさに着て（判を加えず）欠点を指摘しないでおきましては、神のみに心に対しても恐れ多いことでしょう。（それで記しますと）「心もえこそつなざりけれ」と言っただけでは、眺望の心が定めて足りないだろうと思われます。その点、左歌の心はまことに遠い波路が思いやられて、はるかに眺めていると感じられます。そのため左を勝とします。

【注】○くものなみ 雲が重なっているのを波に見立てて言う語。ここでは特に船の進む先の波が続く様子を印象づける。○あまのかはら 天の川の川原。『万葉集』以来その用例が見られ、日本神話では高天原で神々の集まる所であったのが、中国の七夕伝説と結びつけて詠まれることが多くなっている。○張博望之到^リ牛漢^ニ …… 張騫（博望候となる）が、漢の武帝の命で黄河をさかのぼって牽牛・織女がいる所に達したという故事による、大江澄明の対策中の句。「牛漢」は牽牛星。この句は『本朝文粹』（卷三）に見えるが、ここでは引いた『新撰朗詠集』（下、四六〇）に収められたのを、ここでは引いたと思われる。判詞で句の右に添えられている読み仮名は、『新撰朗詠集』の読み仮名と同様である。

【考察】左右の二首は、ともに海上を遠ざかる船のはるかな行方に心

を向けた作であるが、左の歌は、雲の波を分けて行くと見えた船が姿を消したのは、「天の川原にこぎやつけた」と詠んでいる。これは判詞に俊成が言うとおり、張騫が黄河を遠くさかのぼって天の川に達したという故事による大江澄明の句が『新撰朗詠集』（四六〇）に見えるのを取り入れた着想であろう。（この故事は『俊頼髓脳』などにも紹介されている。）

右の歌は、海上を遠ざかる船のはるかな行方に心を引かれ、「心もえこそつなざりけれ」と詠む。心をわが身につなぎ止めておけなくなったというので、「つなぐ」は「船」の縁語として用いたのである。なお、一首は村尾誠一氏校注『新統古今和歌集』では、わたのはら八十島かけてこぎいでぬと人にはつげよ海人の釣舟（『古今集』四〇七、小野篁）を本歌とする作と見られている。

俊成の判詞は、左歌については、張騫の故事による大江澄明の句の心を取り入れた点を挙げ、「いとをかしく」と評価している。

俊成自作の右歌については、眺望の心が少ないのを弱点として挙げ、左歌のはるかな船路を思う心が優れていることと言ひ添え、左の勝と判定している。

【備考】七番右歌は『新統古今集』（一八一）に収められている。

八番 左持

左兵衛督成範

73 おきつなみあまのがはにやたちのぼるこぎゆくふねのそらにみゆるは

右

盛方

74 こぎいでてみおきうなばらみわたせはくものきしにかくるしらなみ
左、これもさきのつがひの左のうたのころにかよへるべし。あまのがはにやたちのぼるといへるころ、をかしくはみえ侍り。そらにみゆと侍るぞ、かみにみえんやうにきこゆれど、なみのすゑのそらにひとつにみゆる心なるべし。

右、くものきしやさしたる心ちし侍れど、これもころはおな

じすぢなるべし。みおきうなばらなどいへるすがた、幽玄の体
みえ侍めれば、持と申すべし。

【通釈】

八番 左持

左兵衛督成範

73 沖の波は、天の川までのぼってゆくのか、——沖をこいでゆく船が、
空に浮かぶと見えるのは。

右

盛方

74 船をこぎ出して、み社の沖の海原を見渡すと、はるかな空の果てに、
白波が打ち寄せている。

左の歌は、これも前の番（七番）の左の歌の着想と共通する作で
あろう。（沖の波が）「天の川にやたちのぼる」と詠んだ心は、面
白いと思われます。ただ、（船が）「空に見ゆ」とありますのは、
上空に見えるように思われるところがあるが、これは波の果てが
空と続いて見えるという意味で言ったものでしょう。

右の歌は、「雲居の岸」という表現が、特に意識して言っている
ように感じられますが、これも左の歌と同様の心によったもので
しょう。「み沖海原」などと詠んでいる歌の姿は、幽玄の姿と見
受けられると思いますので、持と判定しましょう。

【注】○みおきうなばら 御沖海原。広田社前方の海を沖まで神の領
域と見るところから、敬意を表す接頭語「み」を添えて言った。○く
もるのきし 雲居の岸。雲のある空の果て。「岸」と言ったのは、空
の世界が海と接する部分であるためであろう。この語を用いた先行歌
に、「おきつしま雲ゐの岸を行きかへりふみかよはさむまぼろしもが
な」『拾遺集』四八七、ともまさの朝臣の妻肥前。『金葉集』三四一
では為政朝臣妻を作者とする）がある。○幽玄 二番の「注」「考察」
参照。この場合の用法の特色は次の「考察」で触れる。

【考察】左右の歌は、ともに海のはるかな沖が空に続くに見えるのを
眺める心であるが、左の歌は、沖をこぐ船が空に浮かぶと見えるのは、
沖の波が天の川までのぼってゆくのか、と詠んでいる。船の行く手に

「天の川」を置いた着想は、前の七番左歌と同様である。

右の歌は、海上に船をこぎ出して眺望する心だが、はるかに「み沖
海原」を見渡すと、「雲居の岸」に白波が寄せている、と詠む。沖の
白波が空の果てに続くで見ているのであろう。

俊成の判詞は、そういう点に触れながら、左歌については、特に沖
の波が「天の川にやたちのぼる」と詠んだ心が「をかしく」思われる
とする。また右歌については、「み沖海原」などと詠んだ姿が「幽玄
の体」に見えると評し、持と判定している。

この「み沖海原」という語は、「お前の沖」（十一番右、十二番左、
十四番左）と同様の意味を表すようであるが、少しニュアンスが異な
るかと思う。それは、「み沖」と言うと、沖もさながら神の世界であ
る感じが強くなり、さらに「み沖海原」と続けると、その世界が一層
大きな広がりをもって感じられてくるところがあると思う。そういう
世俗の世界を超えた広大な世界の存在が「み沖海原」という表現のあ
たりに感じられることから、俊成はこの部分を挙げて「幽玄」と評し
ているのではないか。なお、そういう超俗的な世界の感じは、「雲居
の岸にかくる白波」という下句にも及んでおり、一首全体の表現上の
特色になっていとも見られるであろう。その意味で俊成は右歌の
「すがた」を「幽玄の体」と評したのではないかと思う。

『広田社歌合』で俊成が判詞に「幽玄」の評語を用いているのは、
先の海上眺望二番とこの八番の外、述懐二十八番がある。基本的な意
味は変わらないと思われるが、用い方はそれぞれ特色が見られるよう
である。

九番

左持

三位中将実家

75 けふこそはみやこのかたの山のはもみえずなるをのおきにいでぬれ

右

僧登蓮

76 ながめやるふなちはあともなかりけりうらみやふかきまつらさよひめ
左、みやこのかたのやまのはもみえずなるをのといへる、なにと

なくこころぼそき心ちして、うたのすがたもめづらしくこそ侍め
れ。

右、ふなちはあともなかりけりとおけるもじつづき、いとよろし
くこそきこえ侍れ。うらみやふかきまつらさよひめといへるや、
すこし腰はなれたる心ちし侍れど、よくおもひとけば、ことばか
すかに心こもりて、なほをかしく侍るべし。持と申すべきにや。

【通釈】

九番 左持

三位中将実家

75 今日はどうとう、都の方の山の端も見えなくなる、鳴尾の沖まで船
出してきたことだ。

右

僧登蓮

76 はるかに見やる、船の去った航路には、もう何も残っていない、
松浦佐用姫の嘆きは、さぞ深かったであろう。

左の歌は、「都のかたの山のはも見えずなるを」と詠んでいる
のが、何となく心細く感じられ、また歌の姿も目新しいようです。
右の歌は、「船路は跡もなかりけり」と詠んだ言葉の続け様が、
大層結構に思われます。ただ「うらみや深き松浦佐用姫」と詠ん
でいるのは、少し腰の句のところで脈絡が途切れていると感じら
れるようですけれど、よく会得すると、表現があらわでなく、
(それだけに)心が内にこめられていて、やはり面白い作でしょ
う。持と判定すべきかと思えます。

【注】○なるを

鳴尾

摂津の国の歌枕。今の兵庫県西宮市の武庫川

河口付近の地名。広田神社に近い。ここでは「見えずなる」の「なる」
を掛けて言う。○まつらさよひめ 松浦佐用姫。大伴狭手彦が任那に
派遣された時、その乗った船を山の上で見送り、領巾を振って相手を
招いたと伝えられる。『万葉集』の歌(八七五、八七五等)に詠まれてい
る。『肥前国風土記』にも伝説が見える。○腰はなれたる(ここでは、
第四句が前の部分の内容から離れている意。「腰の句」は、普通短歌
の第三句を言い、早く『歌経標式』にも「第三句為腰」(抄本、査体

七種の五の解説)と見える。しかし俊成は『六百番歌合』判詞による
と、第四句を腰の句と見ている。すなわち、同歌合春上二十一番右歌
の第三句の字余りを「腰六字、聞きにくくや」と左の方人が非難した
のに対して、俊成は「抑、左方人稱腰句、何句を称申哉。称腰句
は、四韻詩第三对句なり。和歌に有下称腰折句事上は、中五字与下
七々離別せるを謂なり」などと云っている。この俊成の見解は、顕
昭が陳状で『歌経標式』を引いて否定している。

【考察】左の歌は、今日は都の山の形も見えなくなる、鳴尾の沖まで
船で来てしまった、と詠み、都を離れて遠い船旅をする身の心細さを
伝えている。「(見えず)なる」に「鳴尾」を掛けて詠んでいる。

右の歌は、船の去った航路を眺めても何も残っていない、と上句に
詠み、下句に「うらみや深き松浦佐用姫」と愛人の船を見送った伝説
のヒロインの嘆きを挙げている。上句と下句を不即不離の関係で対応
させた表現に特長の認められる作であろう。

俊成の判詞は、左歌については、「なにとなく心細きこち」がし
て「歌の姿もめづらしく」見えると評価している。

右歌については、第二句第三句あたりの言葉続きを「いとよろしく」
思われると評価した後、下句は「すこし腰はなれたるこち」がす
るようだが、よく会得すると「言葉かすかに心こもりて」、やはり
「をかしく」思われると評価している。「注」で触れたように、「腰」
の句は普通第三句を言うのだが、俊成は第四句を考えていたことが
『六百番歌合』の判詞などから察せられる。しかし「腰はなれたる」
と俊成が言うのは、第三句と第四句との間に論理的な意味のつながり
がないのを指すと見られるから、指摘した問題は誤っていないこと
になる。そして、そういう意味のつながりを露骨に示さない、「言葉
かすか」な表現であるだけに、「心こもりて」面白いと評価したと思
われるので、これは適切な評価であろう。

このように見てくると、左右を持とした俊成の判定は妥当なところ
かと思う。もっとも、俊成は『千載集』には左歌のみを収めているが、

これは何か理由があったことであろうか。

【備考】九番左歌は『千載集』(一〇四六)に収められている。

十番 左

大輔

77 いづかたへうらわたりするむらどりのたつかとみればくもにきえゆく

右勝

従三位経盛

78 おきつなみたちゐるほどぞしられけるあはのしまやまみえみえずみ

左歌、すがたはいうにみえ侍り。むらどりとはいへるや、ちどりか

もめなどならば、さまでとほからず侍らん。ふねなどをとりかと

みるほどならば、くもにきえんもいますこしたよりや侍らまし。

右歌、させるなんなく、てうばうのころあり。かつと申し侍る

べし。

【通釈】

十番 左

大輔

77 どこへ向かって入り江を飛び渡ってゆくのか、鳥の群れが、飛び立

つかと見ると、雲の中に消えてゆく。

右勝

従三位経盛

78 沖で波が立っているのが、おのずと知られる、——阿波の山影が、

見えたり、見えなかつたりして。

左の歌は、歌の姿は優美に見えます。ただ「群鳥」と言っている

のは、千鳥やかもめの類であれば、その位置はそれほど遠くない

だるうかと思えます。その点で、(遠い)船などを鳥かと思えた様

子を詠んだのなら、雲の中に消えることも、今少しよりどころが

あろうかと思ふのです。

右の歌は、特にこれという欠点もなく、眺望の心が詠まれている。

勝ると言うべきでしょう。

【注】○うらわたりする 浦を(飛び)渡る。○むらどり 群鳥。群

がっている鳥 ○あはのしまやま 阿波の国(今の徳島県)の山。海

の向こうに見えるので「島山」と言う。○みえみえずみ 見えたり

見えなかつたりして。「見え」と「見えす」の各の後に添えられた二つの「み」は、対立する状態が交互に繰り返されることを表わす接尾語。

【考察】左の歌は、どこへ浦渡りする群鳥なのか、飛び立つかと思える雲に消えてゆくと詠む。右の歌は、海のかなたの阿波の山影が見え隠れして、沖で波が立っているのが分かると詠む。ともに平明な詠み様の作であろう。

俊成の判詞は、左歌については、姿は「優」に見えんとする。しかし「群鳥の立つかと思えば雲に消えゆく」と表現された情景を疑問視している。千鳥かもめなどなら、さほど遠い距離にいたと思われないうと思われるので、飛び立つとすぐ遠い空の雲の中に姿を消すのは不自然だと俊成は指摘したのである。それで、沖の船が遠く小さく鳥に見まがうと詠んだのなら、雲に消えるのも納得できるが、と言い添えたものであろう。

それに比べて、右歌は問題点がなく、眺望の心が認められるとして、勝と判定している。